

第12回

明治大学文学賞

第十二回 明治大学文学賞 受賞作品

第一部門 倉橋由美子文芸賞

大賞 該当なし

佳作 「死因…スマホ死」

瀬田 舞香 (文学部2年)

「翅の音」

久保田 哲生 (文学部3年)

「波枕」

壹岐 南海 (文学部3年)

第二部門 阿久悠作詞賞

大賞 「サピエンスをよろしく」

【B】 課題タイトル作詞形式 小野 胡桃 (文学部1年)

佳作 「星 ー 合ひ・愛ー」

【A】 自由作詞形式 秦 歩之歌 (情報コミュニケーション学部1年)

「しわ」

【A】 自由作詞形式 小島 淳之介 (文学部3年)

「西参道の片隅で」

【A】 自由作詞形式 大塚 和佳 (政治経済学部3年)

【目次】

第一部門 倉橋由美子文芸賞

倉橋由美子文芸賞 選評

「死因…スマホ死」

「翅の音」

「波枕」

..... 1

瀬田 舞香 (文学部2年) 5

久保田 哲生 (文学部3年) 35

壹岐 南海 (文学部3年) 63

第二部門 阿久悠作詞賞

阿久悠作詞賞 選評

「サピエンスをよろしく」

「星 ー合ひ・愛ー」

「しわ」

「西参道の片隅で」

..... 88

【B】 課題タイトル作詞形式 小野 胡桃 (文学部1年) 91

【A】 自由作詞形式 秦 歩之歌 (情報コミュニケーション学部1年) 95

【A】 自由作詞形式 小島 淳之介 (文学部3年) 99

【A】 自由作詞形式 大塚 和佳 (政治経済学部3年) 103

倉橋由美子文芸賞 選評

生方 智子

今回の投稿数はこれまでの中で最も多く、総数にして四八作品であった。しかし、作品全体としては推敲不足なものや凡庸なものが目立ち、残念ながら大賞は出なかった。また、三名の選考委員が全員一致して評価できる作品が殆どなく、長時間の討議の中で、かろうじて三作品を佳作として選出するに留まった。

「募集要項」の「応募を迷っている方、初めての応募を考えている方へ」という文書の中に、投稿者へのアドバイスが記載されている。注意すべき事柄として①応募の前に推敲を行うこと、②学校生活や家族を題材にすると凡庸になりがちであること、③題名を工夫する必要があること、三点が指摘されているが、今回、かな

りの数の応募作品が、この三点のいずれかについて難があると問題になった。

また、今回の応募作品の中に、新型コロナウイルスをテーマとしたものも見られた。それらの作品はいずれも意欲作であり、書き出しが魅力的なものや、物語の半ばまで巧みにプロットが進んでいくものもあった。

しかし、多くがテーマを消化しきれず終わってしまった。その中で、「死因：スマホ死」は突出した完成度を持つ作品である。(スマートフォンと人間が同期した世界)という超現実的でSF的な設定で作品世界が構築され、その世界設定の中で登場人物たちが活動し、緊張感をはらんだプロットは最後まで維持されて読み手を惹き付けた。タイトルに工夫がなかったのが惜しまれる。

「蚊」による一人称語りによってプ

ロットが進んでいく「翅の音」は、視点の設定のユニークさや語り口の巧みさ、タイトルの魅力で好印象を残す作品である。ただし、「蚊」として生きるという状態が人間から見た予測可能性の域を出ていないのが物足りない。「波枕」は、終始一貫して思わせぶりの書き方で、語られているものが何を意味しているのか伝わらない。縦書きのプリントアウトにもかわらず、それに対応しない文字入力であることも含めて読者への配慮が必要である。個人的には「小鳥ちゃんは透明」に魅力を感じたが、実際の個人名が不用意に出てきて誤解を招く恐れがある。広く読まれることを意識してほしい。

渡辺 響子

小説を書く、最後まで書き上げるというのは大変なことである。今年の応募作が史上最多の48篇に及んだのは、だから嬉しい驚きだった。今年も大きく二つの傾向があったと言えるだろう。一つは、果敢に大きなテーマに挑戦したものの、勢いが続かず、先細りになってしまったもの。チャレンジ精神は評価したいが、倉橋由美子の名前を冠した大賞には、あと一歩及ばなかった。もう一つは器用に書いているものの、こじんまりまとまって今ひとつパンチを欠いているものだ。

『死因…スマホ死』は、安易にスマホ依存を描くのではなく、依存が高じて政府が、スマホと所有者の寿命を同期させた近未来という設定が効いている。政府の介入は最初の説明

に出てくるだけで、あとは高校生の視点から描かれているのが良い。前世代から便利なものだとは知らされているが、持っているだけで使えないという不条理な状況にも違和感なく入れるし、細部も破綻なく、名前などの布石もうまく機能している。

蚊を主人公とする異色の設定の『翅の音』は、一匹の蚊が血を吸う多様な人々とその空間を細やかに描いていて、淡々とした語りも好ましく思えた。ところどころ説明的な文章が出てくると、結末がやや唐突なのが残念に思われる。

『波枕』は、謎の集団と出会って視覚以外の感覚を通して世界を再認識し、その体験のおかげで、浴室に引きこもった弟が向き合っていたものに接近する物語と読んだ。双子という設定は、より効果的に活かされたかもしれない。

『すみっこ革命』をはじめ、学校やバイトなど身近な場での出来事を、少しひねった「システム」に組み込む作品も多く見られた。劇画調文体の選択、飄々とした語りは否定しないが、それは塾考の果実であるべきだ。

『アオイオモイ』や『代えがたいってほどじゃない』のように、物事や人間を多元的にみることをモチーフにした作品、戦争中の若者の存在論的不安を描こうとした『セミデウスの門柱』などにも今後の可能性を見た。応募作はいずれも光るものを内包している。小説というジャンルと真剣に向き合った上で構成・文体を磨き、次回作に臨まれることを期待している。

井上善幸

今回は、例年にも増して多くの作品が寄せられたようで、慶賀すべきことと思います。全体を読み通してみても、その質の高さに驚嘆しました。心から敬意を表します。

不満もあります。発想の奇抜さにこだわりすぎ、二つのマイナス要因を抱え込む結果となっていることです。一つは、そのような着想を追うあまり、物語をどう終えるかという問題に直面し、不自然な終わり方に追い込まれている作品があったように思います。それでは困ります。

もう一つのマイナス面は、文体の問題です。物語の展開に気をとられ、文体そのものが練れていない、表現が内容を貧しくしているという印象を受けました。思考を支える文章もしくは文体そのものにもっと自覚的になる必要があります。

「翅の音」は語り手が蚊であるというユーモア感覚が冴えています。「私たち『蚊』と呼ばれる生物」という冒頭の表現がある以上、「私は蚊である」と表明することは不要であると思います。すでに漱石の『猫』もあ

る訳ですから。蚊の幽けき生を動物相と植物相のもとに描き、それが抑制のきいた文章と相まって静謐に表現されているとみました。

「死因…スマホ死」は、ぼくはあまり高くは評価できません。命を数量化する着眼点はいいとしても、「スマホ」に歴史的遠近法を施しながらも、それを批判的に捉える思考が与えられていないと思います。小説のタイトルにコロンを用いるというのも馴染めません。また死因はせめて「スマホ」とすべきであって、「スマホ死」としてしまつては、結果ということになりはしませんか。

「波枕」は引きこもりの存在の洋太が重要な要素を占める作品です。カフカの『変身』を想起させるような設定で、里帆の「ほたるび」での体験は、彼の存在が影を落としているようです。最後に洋太はいなくなりますが、個人的には、そのような結末でよかったのか、と思います。漱石の『こころ』ではKが「先生」の心奥に棲みつくことで作品全体を黒に染めあげますが、ここでは洋太を昇華させることで、「西新の、あの穏やかに微睡むような海」の潮騒を聴かせようとしているようです。作者の祈り

がそうさせたのかもしれない。

もつとも刺激的に映つたのが「ソドムの一隅」です。今回は受賞を逃しましたが、文体面からも読みごたえのある作品でした。とくに後半のタブローに描かれたイマージュを記述する手つきには、どこかフランドル派の絵画を彷彿とさせるような、あるいはその銅版画が動き出すような錯覚に襲われました。似たような感覚をアラン・ロブグリエの『迷路のなかで』を読んでいた時に感じたように記憶しています。晩という名の主人公が滞留する「教会」は三階建て、これは地獄、煉獄、天国が暗示されているのかもしれない。その閉域からの脱出が夢見られているようですが、作者は安易な出口を与えてはくれません。

「往日」も受賞には至りませんでした。が、読ませます。この書き手には批評精神がありません。登場人物に『ウィンズバーク・オハイオ』を賞賛させるかと思えば、『アンナ・カヴァンの暗闇』といった表現さえ出てきます。怪談の語りの部分には冴えを感じました。

「死因…スマホ死」

瀬田 舞香

■受賞のコメント■

今回賞をいただけたことを、心から嬉しく思います。

車に乗ってぼんやりと窓の外を見ていたとき、突然「スマホの使い過ぎで人が死んでしまう」という変な世界を思いつきました。もちろん普段からこのような恐ろしいことを考えているわけではないです。しかし近年よく話題になるスマホ依存症、歩きスマホ、SNS上での誹謗中傷、そしてその感染力で死者を出し、その数が毎日メディアで報道されるほど我々に脅威を与える新型コロナウイルスなどの影響を受けた世界であることは確実です。現代ならではの問題をひとつに凝縮した悪夢のような物語ですが、こんな時代だからこそ想像できた悲しい未来のお話です。

実は前年度もこの文学賞に応募しようと執筆していましたが、その際は規定文字数を大幅超過してしまいそうだと途中で気づき、断念しました。今回は応募期限ギリギリにどうにか自分の書きたい最低限を詰め込むことができたので、書き終わったときにほっとしたのを覚えています。次にいつどこでなんの話を書くのかは見当もつきませんが、そのときは誰かの心を動かせるものを作り上げられたらと思います。

死因…スマホ死

「昨日のスマホ死者数は七百八十五人でした。三日連続で過去最高の死者数を更新し続けています。」

トーストをかじりながら、ぼんやりと朝のニュースを見る。

「最近多いわねえ。どうしちゃったのかしら。」

キッチンで洗い物をしていた母にもニュースキャスターの声が届いたらしく、他人事のような口調でそうぼやいた。

「十代から二十代の若者が死者の八割を占めているようです。田中さん、この原因は一体なんなのでしょうか？」

ニュースキャスターがゲストの男に話を振る。『スマホ死研究者 田中博之』というテロップが表示された。

「そうですねえ…。やはりスマホの使用により寿命が短くなることよりも、好奇心が勝ってしまったのでしょうか。スマホが我々の命と同期されてから廃止

された動画サイトやSNS、マッチングアプリが去年の解禁に伴い続々と復活してしまいましたから。

我々のような六十代以上の年齢層はスマホが普通に使えた時代も生きてきたのでSNS等は体験済みなわけですが、現在の若い世代はスマホを娯楽としていつでも使えるというわけにはいきません。それによつて好奇心が勝り…。」

トーストの最後の一欠片を口の中に放り込み、学ランのボタンを閉めて床に置いてあつた荷物を持つた。

「いってきます。」

「気をつけてね。」

「うん。」

短い会話とともにキッチンを通り過ぎ、玄関でスニーカーを履く。ポケットの中に手を突っ込み、スマホがあるのを確認してから家を出た。

スマートフォンという機械は、かつてはとても便利なものだった。あんな小さな板一枚で遠くの人と

つながることも、調べ物をすることもできる。まるで魔法のような道具であり、発売された当時は皆感動して文明の進化に感謝したという。

しかしスマートフォン、略してスマホは僕たち人間になじみすぎた。スマホが発売されてから約八十年もたったころ、スマホを使いすぎた人間は身体的、精神的なダメージを受けることになった。もはや道ゆく人の七割が歩きスマホをしているため、交通事故は日常茶飯事、いつでもどこでも黙々とスマホを見ているため不気味なほど静かな繁華街の誕生、匿名でできるSNSを利用しての誹謗中傷、それに耐えかねた人々の相次ぐ自殺……。人々を虜にしたスマホは、八十年で人間から人間らしさを奪った。

それを見かねた政府が考案したのが、スマホと所有者の命を同期させることである。人間に特殊なチップを埋め込み、所有しているスマホと同期させることによって、スマホで自分の寿命がわかるようになった。

これだけ聞くと便利になったのかただ残酷な機能

がついただけなのかわからないだろう。しかしこれは間違いなく残酷な機能だ。

なぜなら人間と同期しているのは「スマホ」というよりも、「スマホの充電」だからだ。

例えば埋め込まれたチップにより、生まれた瞬間から数えて寿命は百歳だと判明した赤ん坊がいたとしよう。すると赤ん坊にスマホが支給される。その時点でスマホの右上にある充電マークは満タンで、「100%」と書かれている。ちなみに寿命がいくつであろうと、最初は「100%」となる。赤ん坊が一歳になればスマホの右上の数字は「99%」となり、五十歳になれば「50%」、死ぬと「0%」と表示される。人間が生きられる時間は生まれたときからすでに判明していて、スマホは所有者があと何年生きることができるとか常にカウントする。不思議なことには実際の死因が殺害や不運な事故のような所有者の身体的異常以外のものではあつたとしても、それにより命が尽きるまでの寿命が表示される。もちろんそのメカニズムは公開されていない。

しかし人間がスマホに影響を及ぼすだけでなく、その逆も可能である。つまりスマホを使うとその分スマホと同期した人間の寿命が縮んでしまうのだ。これが「残酷」なのである。

スマホのロック画面を表示する分には寿命が変化することは無いが、パスワードを入れてロックを解除した瞬間から寿命が縮んでいく。一時間の使用で一年分の寿命が縮むそうさ。かつてはスマホが体の一部であるかのように肌身離さず携帯し常に見ているという人も多かったようだが、現在では本当の意味でスマホが「体の一部」となったのである。

この恐ろしい機能が何十年前に搭載されたおかげで、スマホを使用する人は大幅に減った。事故件数が減り、繁華街は活気で満ち溢れ、匿名での誹謗中傷や自殺者も減少した。

その一方で、スマホを使用したことがない人間のスマホへの好奇心は高まっていった。昔の人を魅了してやまなかつたスマホ。それは現在常にいつも自分とともにあるにも関わらず、中身を覗くにはとて

も勇気がいる。それが若者の好奇心を駆り立ててしまった。その中でも誘惑に負け憑りつかれたかのようにスマホをいじってしまった者の突然死が最近多いらしい。死ぬ直前までスマホをいじっていた彼らは、どのような気持ちで死んでいったのだろうか。

「…。」

ポケットからスマホを取り出す。中央上部には日付と時間がある。右上の充電マークには「72%」と表示されていた。現在十七歳で残り「72%」なので、色々計算するとあと六十年は生きられるらしい。平均よりは短いけど、まあいいだろう。スマホを使用しなければ、残りの寿命を表すこの充電が急速に減ることはない。

ポケットにスマホをしまおうとしたとき、後ろからバン！と背中を叩かれた。驚いて振り向くと、そこには見知ったクラスメイトの顔。

「涼真！ 歩きスマホは危ないからやめとけ！」

「歩きスマホ」という言葉を聞いた周囲の人たちが、ぎよつとして僕たちを見る。僕は悪気のなさそ

うな笑顔のクラスメイトの袖を引つ張り、道の端に移動した。

「優斗、でかい声で歩きスマホなんて言わないでよ。

僕は一度もスマホ使ったことなんかないから。」

「いつも使いたい使いたいって言ってるくせに、なに言ってるんだよ。」

優斗はきよんとした顔をしている。今の時期に「歩きスマホ」は禁句だということは、百も承知のはずなのに。なぜなら…。

「そういうえば、優斗は佐々木の葬儀行くの？」

「え？ ああそりゃ行くよ。同じ部活だし。」

優斗は顔を曇らせてそう言った。

一昨日——十月五日、僕たちと同じ学年の男子生徒、佐々木が亡くなった。自宅で突然心臓麻痺を起こしたらしいが、佐々木の友達によると先週の佐々木の充電は「68%」だったそうだ。それにも関わらず死んでしまった理由はただひとつ。スマホの使すぎだ。歩きスマホをしていた様子も目撃されていたらしい。彼がなぜ急にスマホを使い始めたのか、

それは誰にもわからない。

「涼真は行く？」

「いや、僕佐々木と話したことないし、顔もよく知らないし…。僕なんかが行っても喜ばない？」

「たしかになあ…。あつ。」

優斗が足を止めた。駅に行く途中にある小さな公園の入り口だ。

「なに？」

「あれ。」

優斗が顎でしゃくったのは公園のほうだ。奥のベンチに制服を着た女の子が座っている。

「惚れたの？」

「ちげえよバカ。あの子ずっとスマホ見てるんだよ。」

たしかによく見ると、スマホのようなものを両手で持つてじっと見つめている。ロック画面を見ているのだろうか？ でもそれにしても、様子がおかしい。食い入るように画面を見つめている。

「しかもあの子、同じ高校じゃね？ ほら、制服…。」

言われてみれば彼女の制服は、僕たちが通って

る高校のものだ。

「でも僕あの子みたことないよ。」

「それは涼真に友達が俺以外なくて交友関係狭いからじゃん？」

失礼なことをしれつと言われて、少しむつとする。

交友関係が狭いのは本当のことなので余計に。

「じゃ優斗はあの子のこと知ってるの？」

「いや、知らん。」

煽っておいて知らないのか。

「まあまあ、学校で調査してみりやわかることだよ。

ポニーテールで、細くて、顔がそこそこ可愛くて、

スマホカバーはなし。よし覚えた。忘れないうちに

学校行こうぜ。」

そう言うと、優斗はさっさと歩きだした。もう一

度ベンチに目を向けると、その女子はやはり真剣な

顔つきでスマホを眺めていた。やっぱりロック画面

を見ているようには思えない。あの子はロックを解

除した状態でスマホを見続けているのだろうか。だ

としたら、一体なにを見ているのだろう…。

「涼真！ 遅刻するぞ！」

前から優斗の大きな声が飛んでくる。リュックを背負い直し、優斗のところまで走った。

調査はしたものの結局あの子が誰なのかわかってないまま、放課後になった。優斗とは最寄り駅が一緒だが、彼は部活があるため学校に残る。帰宅部の僕は優斗の言う通り交友関係が狭いため学校に残ってなにかするわけでもなく、一人でまっすぐ家に帰るのがいつものパターンだ。

ただ今日は朝見た女子が気になり、なんとなく例の公園で足を止めてみた。夕方ということもあり、公園では小学生が遊具で遊んでいる。

あの女子はブランコに乗っていた。朝見たときと同じ格好で、ブランコをこぐでもなく椅子のようにして座り、やはりスマホを見ていた。

正直いると思っていなかったの、少し驚いた。朝もいたのに、放課後もここにいるなんて。よほどこの公園が好きなのだろうか。それとも…。

ずっとここにいたのだろうか。

彼女はじっとスマホを見つめている。とりあえず僕はブランコの向かい側にあるベンチに腰掛けた。リュックを隣に下ろし、少し考える。

彼女はたまに指を動かし、画面をタップしたりスクロールしたりしていた。間違いなく、彼女はロックを解除したスマホを操作している。ロック画面を見ているだけなら、タップはパスワード入力時にするとしてもスクロールはしない。一体何が彼女をスマホに夢中にさせているのだろうか。やはり昔流行ったSNSだろうか。それとも動画サイトだろうか。一時間使えば寿命が一年縮んでしまうというのに、その恐怖を上回るほど彼女を虜にしてしまう「それは、一体なんだ？

彼女が顔を上げるような雰囲気は一向にない。同じ高校の制服を着ているとはいえ、彼女が僕に気づくことはないだろう。こつちから声をかけなければ。

意を決して立ち上がり、ゆつくりとブランコに近づく。ブランコの周りにある柵のあたりまで来たとき、彼女がすつと顔を上げた。

清楚という言葉がふさわしい綺麗な顔だった。前髪が眉毛の上できつちり切りそろえられている。大きな瞳が、驚いたように僕を見上げていた。その美しさに一瞬見とれるが、彼女から発せられた冷たい声ですぐに我に返った。

「…なんですか？」

彼女の指が電源ボタンに触れ、スマホの画面が暗くなった。

「ああ、えつと…。高柳高校の二年生です。その制服、キミも高柳だよね？」

「だからなんですか？」

彼女の警戒心丸出しの態度に心が折れそうになるが、まあ普通はそうなるよなど無理矢理納得し、話を続ける。

「いや、僕登校するときいつもこの公園の横通るんだけど、なんか朝もキミがこの公園のベンチにいる

の見かけて…。」

「で？」

「で…。ずっとスマホ見てるから、なに見てるんだろって気になって…。」

「なに見てたつていいじゃないですか。」

「ああ、まあ、いや、そうなんだけど…。」

何を言っても冷たく返される。よほど信用されていないようだ。

「でもほら、やっぱりスマホじつと見てるとちよつと心配になるじゃん？ それが同じ高校の人だと思うと、なんかこう…余計に心配になっちゃやてさ、だから今もこうやって声とかかけちゃったんだけど…。」

なんだか悪いことをしているような気分になり、だんだんとしどろもどろになるのが情けない。僕の声は自然にフェードアウトした。

「…隣、座りなよ。なんか見下ろされてるのやだから。」

予想外の言葉に、「へっ？」と間抜けな声が出る。

「いいから座りな。」と、ぶつきらぼうに促され、俺は慌てて座った。

「そんなになに見てるか気になるの？」

彼女は僕のほうではなく、どこか遠い場所を見てそう尋ねた。思わずうなずいたが、彼女の視界に入っていないことに気づき、慌てて「うん。」と返す。「まあ、SNSとか検索サイトとか、色々。なんかよくわかんないけどね、とりあえず色々やってみる。」

「へえ…。楽しいの？」

「まあね。操作方法とか使い方はいまいち慣れないけど。でもいろんなこと知れたよ。」

「どんなこと？」

「んー、例えばスマホが自由に使えたころ、スマホと同じことをパソコンでもできたんだつて。パソコンでSNSやったり、動画見たり。あと昔はスマホでもパソコンでも、お金払って契約すれば映画が見れたらしいよ。」

パソコンは今でも普通に使えるものの、通常のも

のは文章やスライド等を作成するツールしか搭載されてない。娯楽機能はいつさいないのだ。

「マジ？ そんなこともできたの？ もはやテレビじゃん。」

「すごいよね。他にもいっぱい、いろんなこと知れた。スマホめちゃくちゃ楽しいし、これで死んじやう人が出るのもわかった気がした。」

彼女がうつむき、顔が影で包まれる。

変な沈黙が続いた。彼女がなにも言う素振りを見せないで、僕はおそろおそろ尋ねた。

「…スマホ見るの、怖くないの？」

その質問に、彼女はゆっくりと顔を上げた。やはり僕のほうではなく、遠いどこかを見ている。

薄い唇が少し開いた。

「私ね、死にたいんだ。」

思いもよらなかつた言葉に、頭をガツンと殴られたような衝撃を受ける。死にたい？ この子が？

「え…。なんで…？」

「なんだっていいじゃん。とにかく私は死にたいの。でも自殺する勇気がないから、スマホ使って充電を消費してるの。私はこれで死にたいの。」

そう言うとき彼女は、スマホの画面を僕に突きつけてきた。右上の充電マークの表示を見て、はっと息をのむ。

『38%』…。

「そう。私の場合あと三十時間ぐらいスマホをいじってれば死ねる。どんな死に方をするのかわからないけど、まあ死ねるんならなんでもいいや。」

可愛らしい顔にうつすらと笑みを浮かべながら話す彼女の顔を見て、ぞつとする。そりやそうだろう。本気で死のうとしている人間を前にして怖くならないやつなんていない。大きな丸い目は、死んだ魚のようにうつろだった。ぽっかりと穴が開いているようだった。

彼女のからっぽの目を見て凍りついている僕をよそに、彼女は地面に置いたバッグを持って立ち上が

った。

「ずっとスマホ見てたから目が疲れちゃった。もう帰るね。」

スマホをブレザーのポケットにしまい、彼女は僕に背を向けて公園を出た。

取り残された僕は、しばし茫然としてその華奢な背中を見送る。

「あ、そういえば……。」

彼女の姿が見えなくなつて数分たつてから気づいた。

あの子の名前、なんていうんだろう。

次の日の朝、彼女は公園にいなかった。優斗にも会わなかったのです、一人で学校に行く。

その日は何回か優斗と話したが、優斗は昨日の女の子のことはもう忘れたのか気にしていないのか、彼女の話は一度も出してこなかった。僕も口にはしなかったが決して忘れたわけではない。優斗には黙っていいようと思ったのだ。きっと友達が多くて口が

軽い優斗に話したら、この噂は一瞬で広まるだろう。彼女のためにもそれは避けなければ。死にたいと願っていることを広められて喜ぶ人はそういないだろう。

いつも通り学校が終わり、帰りはいつも通り一人だった。いないかもしれないが一応確認しようと、公園に立ち寄る。すると今度はブランコではなく、ベンチのほうに彼女はいた。例のごとくスマホを見ている。

今回はためらうことなく、まっすぐに彼女のもとへと進む。昨日最後に見せたあの心のない笑顔を思い出し足がすくみそうになるが、それでも彼女に近づいて行つた。

彼女は僕に気づくと、ベンチの端に寄りあいているほうを手でとんとんと叩いた。座れということだろう。

僕が座ると、彼女は何も言わずにスマホのロック画面を見せてきた。充電は「30%」。昨日よりだいぶ減っている。一体何時間スマホをいじっていたの

だろうか。本人の望みとはいえ、少し胸が痛んだ。

「目疲れちゃった。ちよつとお話ししようよ。」

彼女は唐突にそう言ってきた。

「えっ、お話し？」

「うん。どうせ私死ぬから、お互いなんでも話せるでしょ。」

「じゃ死にたい理由教えて？」

「それは内緒。」

そう言って、彼女はうふつとほほ笑んだ。不覚にも可愛いなと思ってしまう、慌ててその感想を振り払う。まあでもしょうがないか。昨日見せた笑顔より、こつちのほうが断然かわいい。誰が見てもそう言うだろう。今のはしようがない。

「いいよ。なに話す？」

お互いのことをほぼなにも知らなかった僕たちは、いろいろなことを話した。お互いの誕生日、血液型などの話から、生い立ちまで——。僕は人と話をするのは得意じゃないけど、彼女は話すのがとても上手だった。清楚な見た目をしているにも関わらず中

身は雑で、よく毒を含んだ物言いをする女子だった。

「私ね、最近学校行つてないの。」

「そうなんだ。ずつと公園にいるってこと？」

「まあね。ずつとここでスマホ触ってるよ。」

「なんで行かないの？」

「だって死ぬんだから勉強する意味なくない？ まあ制服着て家出ないと親に色々言われるから制服着てるけど……。」

「学校から家に電話いったりしないの？」

「するけどうちの親電話嫌いだから、かかってきても出ないタイプなんだよね。留守電とかは私がこっそり消してる。まあその前に留守電聞かれたら終わりだけどね——。」

そう言って彼女は豪快に笑った。昨日会ったばかりのときはあんなに冷たかったのに、今日はなんでもべらべらとよくしゃべる。本当は人懐こく打ち解けやすい人柄なのだろう。

その日だけではなく、僕たちは学校がある平日は夕方公園で毎日おしゃべりした。その日学校であつ

たことや世間話など、たわいない会話をし続けた。その時間は本当に楽しいものだったけれど、会う度にまず彼女がスマホのロック画面を見せてくるあの瞬間が、日に日に辛くなっていた。「22%」、「19%」、「15%」……。どんどん削られていく彼女の命と、それとは反対にだんだん明るさを増していくような彼女の話しぶり。まるで死を楽しみにしているかのようなだった。彼女を見ていて、その声を聞いていて、本当につらかった。

それはなぜか。
簡単だ。

彼女に死んでほしくないからだ。

なぜ死んでほしくないのか。

簡単だ。

彼女を好きだからだ。

驚いたことに僕はこの数日で、彼女にすっかり夢中になっていった。恋愛には疎い僕でも、さすがにこの気持ちがあることはわかる。彼女と話しているうちに、最初はあんなにおっかなかった彼女の人の

間味や面白さ、そして可愛さを知った。彼女となるべく長い時間一緒にいたいがために、通常よりも早く歩いて下校し毎日必ず公園に立ち寄った。下校中ももしかしたら今日彼女は公園に来ていないのではないかと心配になったこともあったが、その心配とは裏腹に彼女は毎日公園にいた。公園で彼女を見つけたたびに、ほっと胸をなでおろした。

彼女を見るたびに胸が高鳴るが、毎度毎度その後「彼女はもう死ぬ」という事実を思い出し、地面をのたうち回りたくなるような気持ちになる。どこか恍惚とした表情でうっとりとしてロック画面を見つめる彼女に、僕はなんと声をかけたらいいいのかかわらない。彼女の死を止めたいのはたしかだが、僕には彼女が死にたいと思っている理由がわからないので止めようがない。それとなく聞こうとしても、毎回はぐらかされてしまう。言いたくないことを無理に聞き出すのはよくないだろう。でもこの調子では彼女が死んでしまう……。

授業中にこの思考を延々とループし、いつの間に

か放課後になったので帰ろうとしたある日のこと。優斗が足早に教室を出ようとしていた僕を呼び止めた。

「なに？」

「そーいや前に公園で見た女の子のことなんだけどさ…。」

思わず体が跳ね上がりそうになったのを、全力で阻止する。思いがけない発言だ。

驚いていることを悟られたくなかったので、「ああ、あの子ね。」と、さもたった今彼女の存在を思い出したかのように頷いた。

「誰かわかったよ。まあ実は会った次の次の日ぐらにはわかってたんだけどさ、お前に言うの忘れてて。」

「は？　なんで？」

言ってからしまった、と口をつぐむ。予想通り優斗は「なんでそんなキレてんの？」と不思議がったが、それ以上の追及はせずそのまま話を続けた。

「八組の女子だったさ。でもなんか最近学校行って

ないらしい。」

「へえ、そうなんだ。」

最近学校に行っていないことはすでに知っている。彼女との会話を思い出していると、クラスメイトは思いもよらなかったことを口にした。

「なんかいじめられてて、それで不登校になったらしいよ。」

「…いじめ…られて？」

待てよ、なんだそれ。

聞いてない。

「…それマジ？」

「マジ。なんか八組の怖い女子グループがいじめてたらしい。結構長く続いたみたいだけど、その子が不登校になったのはほんとに最近のことだったさ。」

…。ということは、彼女が死にたい理由はもしかして

「気が弱くてすげー無口な女子なんだって。でも顔が可愛いから男子にモテてみたいで、それが怖い

女子の気に障ったんじゃない？ っってことらしい。」

いじめに遭っていて、それに耐えきれなかったんだ。だから彼女は死のうとしている。

いてもたってもいられなくなつて、僕は教室を飛び出した。うしろから優斗の声が聞こえるが、なにを言っているのかはわからない。

とりあえず彼女のところに行かなきゃ。今までは死にたい理由がわからないから、彼女を止めることができなかった。でも理由を知った今なら、どうにかして止めることができるかもしれない。少なくとも彼女の気持ちを理解したうえで話すことができる。

学校を出てから公園までの記憶はあまりない。相当焦っていたようで、気づけば僕は公園の前にいた。公園のすべてのベンチに目を向ける。いた。砂を蹴つて駆け寄る。彼女はすぐ僕に気づき、スマホから顔を上げた。

「…また来たんだね。」

「うん、来たよ。あのさ…！」

彼女がぱつとスマホ画面を僕の顔に突きつけた。

その急な動きに驚いて言葉を飲み込み、充電マークを見る。「10%」と書かれていた。

ん？「10%」？

「昨日と同じ…。」

そういえば昨日もたしか「10%」だったはずだ。

つまり彼女は、昨日僕と会ってからスマホのロックを解除していない、もしくは充電の数字が変わるほど使つてはいないということだ。

はつとして彼女に目を向ける。いつもなら嬉々としてスマホを見せてくれるはずの彼女がうつむいていた。長いまつげが目元に影をつくっている。

「どうしたの…？」

荒くなった呼吸を整えつつ尋ねると、彼女はきゅつと結んでいた口を開いた。

「なんかね、死ぬのが怖くなっちゃった。」

「えっ…。」

彼女が顔を上げる。どこか顔色が悪い。いつもより生気のない顔が、僕を見上げる。

「これが『0%』になったら死ぬんだよね？ でも

さ、仮にこのままスマホを使い続けて『1%』までいったとするじゃん？ そのときのことを考えたら怖くて…。」

スマホ死の死因は人それぞれだ。佐々木のように突然死する人もいれば、車に轢かれる人、突然首を吊り始める人、背後から刺される人…。スマホ死は死に方を選べない。本人の意思に関係なく、スマホの所有者を死に誘う。

「どんな感じに死ぬのかも、いつ死ぬのかっていう正確な時間もわからないし、怖くなっちゃって…。」
「そっか…。」

彼女の肩は小刻みに震えていた。もし僕が臆病じゃなかったら、肩を撫でたに違いない。でも僕はそんなことができるタイプじゃなかったから、死を前にして震える彼女を見て考えることしかできなかった。

彼女は死にたがっていた。でも今は死ぬことが怖いと言っている。これはきつと寿命を削るのをやめさせるチャンスだ。彼女にとっては不本意だと思う

し、ここでスマホをいじるのをやめたところで彼女の寿命は十年もないかもしれない。それでも彼女が生きてくれるのなら…。」

「じゃあさ、もうこんなことやめようよ。」

「…こんなこと？」

「うん。スマホ死しようとしてること。死ぬのが怖いってことは、やっぱり生きていたいっていうことじゃないの？」

そう言うと、彼女は小さく笑った。

「たしかに死ぬのは怖いよ。でもね…。」

物憂げな瞳が僕を見る。

ぞつとするほど綺麗な目。

「このまま生き続けることのほうが怖いのだ。」

「…。」

なにも返せなかった。さっきまでの希望が、一瞬で静かに砕け散る。死より生が怖い世界。まさに「死んだほうがマシ」ってやつだろう。彼女が死への恐

怖を語っていたときに「チャンスだ」と考えてしまったことを後悔した。目の当たりにした死への恐怖よりも怖い「生」というのは、一体どんなものなのか。おそらく僕が考えているよりもっとハードで黒いものだったのだろう。どんないじめがあったのかはわからないし、きつと内容を聞いたところでの壮絶さは僕にはわからない。

彼女の死を止めるのは無理だ。

「…じゃあどうやって死ぬつもりなの？」

「スマホ死だよ。」

「でも怖いでしょ？」

「うん。だからね、お願いがあるの。」

「お願い？」

彼女は僕にスマホを差し出した。

「このスマホを預けるから、私のいないところで適当に使って。充電がなくなるまで。」

恐ろしいお願いに体が硬直する。真っ暗な画面に、

青い空が反射していた。

正気か？

彼女はきつと、死を意識せずに死にたいのだろう。さきほど『1%』になったときのことを考えると怖いと言っていた。「もうすぐ死ぬのはわかっているが、具体的にあと何秒後に死ぬのか、どのように死ぬのかわからない恐怖」をなくすために僕にお願いしているのだろう。

たしかに僕にスマホを託して僕がスマホを使えば、彼女は自分で自分の死へのカウントダウンを行うことも、死に怯えながら命を削る必要もなくなる。なぜなら彼女からは残りの充電が見えないからだ。

「…断つたらどうする？」

「そりや自分でやるよ。死にたいから。」

きつとこの子は、僕に好意を寄せられていることに気づいていない。だからこんな残酷なことを言う。

「ちゃんとパスワードも教える。SNSやってみるのもいいし、動画を見てみるのもいい。普段いじる

ことのないスマホを好きにいじれるんだから、悪い話じゃないでしょ？」

たしかに最初キミを見たときは、スマホの中身が気になってしょうがなかった。なにがキミをそんなに惹きつけるのか知りたかった。ロック画面のその先を知りたかった。でも今は違う。そんなのはもうどうでもよくて、僕はただ…。

「私のためだと思ってやってよ。」

「…本当に死にたいの？」

「うん。」

「後悔しない？」

「うん。」

重い質問をしているのに、拍子抜けするほど軽い回答。

僕は彼女が好きだ。だからこそ生きてもらいたい。ただどそのことよって彼女が苦しむなら、彼女の願いを聞き入れるべきなのかもしれない。死ぬことが彼女にとつての「幸せ」になるのなら、現時点で彼女を「幸せ」にできるのは僕しかない。

こんなに悲しい「幸せ」があるだろうか。

「…わかったよ。」

観念したように答えると、ようやく彼女はいつものように笑った。きゅつと細めた目が、とても可愛らしかった。

「そのかわり、スマホを使うタイミングも時間も、全部僕が決めるから。」

「うん、そうして。じゃあパスワード教えるね。」

彼女はバッグからメモとペンを取り出し、数字と英字が組み合わさった十二桁のパスワードを書いて渡した。

「充電がなくなったらちゃんと指紋とかふき取ってね。犯罪にはならないけど、人のスマホいじるのはやっぱりイメーজ悪いから。もし私の遺体を見つけたらその近くに置いてくれればいいけど、そうじゃなかったら川にでも投げ捨てといて。」

彼女は淡々とそう言うと、スマホを僕に押し付けた。

「もしかしたら今日で永遠に会えないかもしれない

けど、なにか言いたいこととかある？」

永遠に会えない。そのワードがぐるぐると頭を回り、手から力が抜けてスマホを落としそうになった。こんなにあっけないお別れなのか。

「…じゃあ最後に、名前教えて。」

そういえば名前を知らないことを思い出し、そう尋ねた。まだお互いに名乗っていない。名前も知らないのによくこんなにも仲良くなれたもんだ、と整理のつかない頭でぼんやりと思う。いや、仲良くなっただけかと思っただけかもしれないが。

「…水野。」

それだけ言うと、彼女はバッグを持って僕の横を通り過ぎた。ふわっと甘い匂いがする。やがて彼女の背中は見えなくなった。

「…。」

彼女のスマホに目を落とす。

「僕の名前、聞いてくれなかったなあ…。」

本気になってしまったのは、僕だけだったようだ。

「…さようなら。」

そう呟いて、彼女にお別れの挨拶も言われなかったことに気づく。

頬を生暖かい何か伝い、青空を反射するスマホの画面にぼたりと落ちた。

家に帰るなり自分の部屋に入り、静かにドアを開める。荷物と水野さんのスマホ、メモを机の上に置き、ベッドにあおむけになった。視界に薄茶色の天井が広がる。

このスマホが水野さんのもとに返ることはないだろう。そして水野さんと会うことも、もうきつとない。

もし僕がこのスマホのロックを一度も解除せずにいたらどうなるだろうか。このままスマホを触らずにいくと彼女があとどれくらい生きることができるとかはわからないが、いつまでも死がこないことを不審に思うだろうか。そしていつ来るかわからない死と、それよりも恐ろしい生の間に挟まれて、さらに苦しんでしまうのだろうか。

僕は水野さんに生きてほしいと思っっている。それは水野さんが好きだから。でも水野さんは死にたがっている。それは生きるのが嫌だから。

好きな女の子のために僕がしてやれることは…。

僕は机の上にあるスマホを見た。カバーもなにもない、無機質な四角い板。

これで彼女を幸せにしよう。

立ち上がり、スマホとパスワードのメモを手にとった。スマホの電源を入れ、メモを見ながらパスワードを打ち込む。心臓の音がやたらとうるさい。震える指で最後の一文字をいれた瞬間に画面が切り替わった。四角いアイコンの羅列が表れる。これがロック画面の先。

この画面をつけているだけで寿命が縮んでいくというのに、だいぶあっさりと入れてしまった。ド派手な警告画面でも出るのかと思っただが、そんなものはなかった。色とりどりのアイコンが並んでいるだ

けだ。たしか「アプリケーション」という名前だった気がする。中学生の頃保健の授業で習った。これを押すと「アプリケーション」が起動する。

とりあえず適当なアイコンをタップする。また画面が切り替わり、電卓のような画面になった。数字や記号のボタンがある。適当に式を入れ「＝」を押すと、普通の電卓と同様に計算結果が表示された。なぜスマホに電卓機能なんてあるのだろう。普通に電卓を使えばいい話なのに。

他にもタップしてみる。カレンダーや時計、メール、コンパスなど様々な機能が搭載されているようだ。

右上に表示されている残りの充電はまた「10%」。とりあえず1%減るまでいじってみよう。そう決めて、また別のアイコンを押した。

一日につき1%減らすことにした。普通に学校に行きばーっと授業を受けて、放課後になると家に帰ってスマホをいじる。公園を通るたびに水野さんの

姿がないか確認していたが、あれ以来一度も見かけることはなかった。

充電が「7%」になった頃にはスマホの操作にも慣れた。基本的に音楽サイトで音楽を聴くか、動画サイトで動画を見ていた。この動画はスマホの「アプリケーション」でしか見ることができないため、視聴者の命は削られていく。だから見る人は少ないのだろうと思ったが、再生回数は多くて一万回を突破しているものもあった。思っていたより視聴者は多いようだ。

内容としては「○○をやってみた」系のものが多く、たしかに一度見たらハマってしまうかもしれない。もしこんな状況でなかったら、自分の命を顧みず「ちよつとぐらいい…」と言って長時間見てしまう可能性もあるだろう。でも…。

僕は動画を再生したまま音量をゼロにし、スマホを裏返してバッグの中から教科書を取り出した。

こうしている間に彼女は確実に死へと近づいている。そう考えると、スマホの画面なんて見たくな

った。別のことをしていないと、気が狂ってしまいうる。そうだった。

やがて充電が「3%」になった。水野さんの死はもう間近に迫っている。今までは淡々と充電を消費してきたが、さすがにそろそろ限界だ。スマホを手にとっても、なかなかパスワードを入れる気にならない。

自らの手で好きな人を殺す恐怖。頼まれたからといって割り切れるものじゃない。罪悪感と悲しみで胸が張り裂けそうにもなるが、きつとこの間にも彼女はもつと辛い思いをしている。いつまで生き続けなければならぬのだろうかと憂いている。

「水野さんのためだから…」

そう言っただけで自分を奮い立たせ、今日もなんとかスマホのパスワードを入れた。早くこの日常が終わってほしいと願うが、本当に終わったとき彼女はもうこの世にはいない。

重い気持ちに蓋をするように、スマホを裏返した。

次の日の朝、教室に入った瞬間すでに登校していた優斗に抱き着かれた。

「えっ、なに……？」

優斗が顔を上げる。その目は潤んでいて、鼻のてっぺんが赤くなっていた。

「昨日佐々木の葬式行ったんだけどさあ……。」

ああ、そういえばそんなこともあったなあ。

「佐々木のかーちゃんがさ、これも燃やしてくれて言っって手紙を持ってきたんだよ……。」

「手紙？」

「うん。五組の高橋葵いるじゃん？」

「ああ、あの可愛い子？」

「そうそう。で、佐々木って高橋葵が好きだったみたいでさ、高橋に向けたラブレターだって。しかも二通。一通目は普通に告白ってかんじだったけど、二通目はもうほんとに『好きだから！マジで！』みたいなかんじのやつだったらしいよ。で、ほんとに泣けるのがこっからで、佐々木は二枚目のラブレ

ター書いてる途中で死んだらしい。佐々木のかーちゃんが言っってた。」

「そういえばさっき五組の教室の前の廊下がやたらと騒がしかったなあ」と、ぼんやり思う。

「それでなんで泣いてるの？」

「は？これ聞いて泣けないほうがおかしいだろ。」

一通目が家にあるってことは突き返されたってことじゃん？で、二通目も書いてたってことは振られても好きだったわけじゃん？それなのに渡せなかったって報われなくね？学年一のイケメンでも振られるって思うと俺なんて……。」

「佐々木のことと泣いてるの？自分のことで泣いてるの？」

「両方だよ！」

「そうかみついて、優斗はまた泣き始めた。」

一度でも思いを告げられただけマシじゃないか。

僕なんてもう思いを伝えられないうえに、好きな子を自分で殺さなきゃいけないんだから。

そんなことを考えてしまい、さらに憂鬱になった。

今日は「2%」にしななければならない。家に着いてから約五時間。いつものように逡巡した挙句、ようやく水野さんのスマホを手を取った。日に日にパスワードを入力するまでの時間が長くなっている。

いつものようにロックを外すと、いつの間にか見慣れてしまった、アプリだらけの画面。ため息をつき、意味もなくなったひたすら右へとスクロールしてみる。

「…ん？」

見慣れないアイコンが二つ出てきた。一つは分厚い本のマーク、もう一つは吹き出しのマークが描かれている。ホーム画面を左右にスワイプすると別のアプリがあるホーム画面になることはもちろん知っているが、ここまで右にスワイプしたのは思えば初めてだ。すべてのアプリをチェックしたと思えば初めだったが、こんなところに見落としがあったとは。

本のアイコンをタップして開こうとすると、「パスワードを入力してください。」という表示が出た。見

てはいけないものだろうか。罪悪感が生じたが、そんなの今更じゃないか、とその感情を振り払う。

パスワードはまったく見当がつかなかったが、とりあえず水野さんに関する数字をかたづけしから入っていた。誕生日、ラッキーナンバー、好きな数字…。いくつか試したが当たらない。

何度も何度も数字をひねり出してはパスワードを打ち込み、さすがにそろそろ諦めようと思つて適当に「1234567」と入力したら画面が切り替わった。

いや嘘だろ？ あまりにも適当すぎないか？ と拍子抜けする。誕生日よりさらに単純なパスワードを設定してしまうあたりが、水野さんらしい。

さて、このアプリは一体なんなのだろうか…。

「…ん？」

そこにあっただのは一枚の画像。二人の子どもが写っている。一人はどう見ても幼い水野さんだった。

おそらく五、六歳ほどだろうが、笑い方が今とそっくりだ。

もう一人は知らない男の子だった。満面の笑みでこちらを見ている。

二人はぶくぶくした小さい手でどこなくピースをつくり、それとは逆の手をつないでいた。可愛らしくてなんとも微笑ましい写真だ。

一瞬男の子のほうは水野さんの兄弟かと思ったが、たしか彼女は一人っ子だ。親戚の子どもかもしれないし、普通に友達かもしれない。そこはさすがにわからないが、二人とも本当に楽しそうだった。

しばらく謎の写真をぼーっと眺めていると、ふと画面右上の充電マークが赤く点滅していることに気づいた。

その数字は…「1%」。

「えっ…！」

慌てて電源ボタンを押す。子どもの写真が消えた。

まずい。まずいぞ。いつからの残り「1%」になつていた？

いつもは充電を気にして操作しているため、数字が変わったことにはすぐ気づく。しかし今回はパス

ワードを考えるのに熱中していたこと、写真をなんとなく見続けていたことにより、充電のことをすっかり忘れてしまっていたようだ。

この「1%」が「2%」よりの「1%」なのか、「0%」よりの「1%」なのかわからなくなってしまうた。よりによって、最後に気を抜いてしまうなんて。

「…。」

なにがあっても、明日で最後だ。ここまできたらスマホを放置してタイムリミットを待つのではなく、早く彼女を楽にさせてあげよう。

深呼吸をする。気持ちを落ち着かせる。

明日で終わらせよう。彼女の願いを叶えてあげよう。

もうやるしかないんだ。

明日が彼女の命日。彼女は一体、今日という日をどうやって過ごしているのだろうか。明日に死ぬとも知らずに。

次の日。放課後になると、僕はすぐに教室を出た。誰にも話しかけられないように、誰とも目が合わないように、下を向いて早足で歩く。

そこからの記憶はない。気づいたら僕はあの公園で足を止めていた。なんだかこの感覚、覚えがあるな。

公園を見回す。いつも通り小さい子供たちが遊具で遊んでいた。ちょうどブランコがあいていたので、ブランコに座る。横に荷物を置き、水野さんのスマホを取り出した。いつもは自分の部屋の机の引き出しにしまっているが、今日はここでスマホを開きたかった。この思い出の場所で、彼女を送り出したかった。

パスワードを入力する。それも今回で最後だ。明日以降このスマホが動くことはない。

今日やりたいことは決まっていた、昨日開けなかったもうひとつのアプリを開くことだ。ホーム画面を何度も右にスクロールし、二つのアプリが出てきたところで指を止める。吹き出しのアイコンをタッ

プすると、パスワード入力を求められた。五桁だ。

「12345」と打つと、案の定開いた。パスワードを設定した意味はあるのだろうかと思きれてしまう。

するといつかのテレビで見たことのある画面が出てきた。欄があり、アイコンの隣に名前、会話らしき文章がある。

「：チャット、アプリ？」

遠く離れた人でも文字でやりとりができるアプリ。こんな時代になる前は大いに流行ったという伝説のアプリ。

「ほんとにあるんだ…。」

しかしテレビと違ったのは、欄がひとつしかなかったこと。その欄には「蓮」という名前があったが、他にやりとりしていた人はいなかったということだろうか。

「蓮って、たぶん男だよなあ…。」

悪い考えがよぎった。アイコンは本人の写真ではなく犬の写真だったが、名前からして男だ。

水野さんが命を削りながらチャットした男……。どうか家族であれと願いながら、その欄をタップした。画面の両側から吹き出しが出ている。

「幼馴染としてではなく、ずっと前から好きでした。憧れていました。今までいじめに耐えてこれたのは、あなたがいたからです。でも裏切られた以上、もうあなたを頼れません。」

「今までありがとう。大好きでした。さようなら。」

画面右側の吹き出しが連続している。しかし「蓮」はなにも返していないようだ。

さすがの僕でもわかる。これは「告白」というやつだ。文面ではあるが水野さんの「告白」を目の当たりにしてしまい、鉛のように体が重くなったのを感じた。相手の名前が男子らしかったので、なんとなくこういう系かもしれないという予想はついていたが……。

ショックを受ける一方で、「裏切られた」の部分に

引っかかった。一体「ずっと前から好き」だった彼との間になにがあったのだろうか。少し気は引けたが、興味本位で画面を上をスクロールしていく。

ちゃんと左側の犬のアイコンからも吹き出しが出ていた。一番上までスクロールし、最初から会話を見ることにする。悪いことをしているような気もしたが、やっぱりそんなの今更じゃないかと罪悪感を振り払って会話を追いかけた。

十月二日

「今日のなんだったの？」

『ほんとにごめん。でも葵のこと好きなのはほんとだから。手紙に書いたこともほんと。幼稚園の頃からずっと好きだよ。』

「嘘でしょ。あの女子たちに嘘告しるって言われたんでしょ。」

『まあそうだけど。』

「ほら嘘じゃん。信じてたのに。」

『たしかに女子たちに言われて告白したけど、本当

に好きだった。』

「そういうのいいから。」

『違う。』

「嘘告されたときも言ったけど、私だって蓮のこと幼稚園の頃から好きだった。でもこんな人だと思っ
てなかった。人のこと騙して楽しいの？ なんの遊
び？ 幼馴染だし一番信用できると思ってたのに、
こんなことされると思わなかった。」

『ごめん。』

「蓮も私をいじめてるあの子たちと一緒だよ。」

『俺は違うよ。ただ逆らったら葵にもっとひどいこ
とするって言うってたから仕方なく言っただけ。』

「もういい。疲れた。黙って。」

『ごめん。』

十月五日

「なんかみんなの間で蓮が私じゃなくて五組の高橋
葵さんに告白したことになってるよ。どういうこ
と？」

「高橋さんにも告白したの？ それとも誰かが嘘を

言いふらしてるの？ 教えて。」

「ねえ。」

「なんで返事してくれないの？」

「大丈夫？」

「なにかあったの？」

十月七日

「返事して。」

十月八日

「ねえお願い。」

「どうしたの？」

十月九日

「あれだけひどいことをしておいて返事もしない。
ずっと未読。裏切られた悲しみでいっぱいです。ど
うして私がこんな思いをしなきゃいけないの？」

「幼馴染としてではなく、ずっと前から好きでした。
懂れていました。今までいじめに耐えてこれたのは、
あなたがいたからです。でも裏切られた以上、もう
あなたを頼れません。」

「今までありがとう。大好きでした。さようなら。」

「嘘でしょ…。」

すべてを読んだ僕は、荷物を引つ掴みダッシュで家に向かった。ある事実を確認するためだ。

家に帰るなり靴を脱ぎ散らかし、自分の部屋に駆けこむ。スマホを机の上に置き、脇に積んであるプリント類を漁った。今年の四月に配られたから、下のほうにあるはず…。

あった。二年次のクラス分けだ。すぐさま八組の欄を探すと、すぐに「水野葵」という名前が目に見え飛び込んできた。

続いて二組の欄を探す。真ん中あたりにあったその名前を見て、心臓がドクツと脈打った。そこに記された名前は予想通り「佐々木蓮」だった。

「あ…ああ…。」

ようやくすべてを理解した瞬間、背中の方で血の気がざらりと引く感覚がした。どうしようもないやるせなさに襲われ、ベッドに突っ伏してしまいたい気持ちになった。

しかし真実を知った以上、ここにいるわけにはいかない。僕は彼女のスマホをとり、自分の部屋を飛び出した。

急がなければいけない。手遅れになる前に。

水野葵さんと佐々木蓮は幼馴染で、仲が良かった。おそらくスマホにあった写真に写っていたのは、幼い二人のものだろう。二人は両想いになったが、互いの気持ちを知らないまま過ごしてきた。

しかし高校で水野さんが一部の女子に認められ、てしまい、彼女たちが学年で一番モテる佐々木蓮に、嘘の告白を水野さんにしてほしいと頼んだ。その際に優斗の言う「一通目の手紙」が渡されたのだろう。

その告白がはじめをしていた女子たちの命令によるものであることがわかり、水野さんはショックを受けた。そしてあのチャットにいたる。

佐々木蓮からのチャットの返信が途切れたのは十月五日。佐々木蓮の命日だ。返信がかえってくるはずがない。それにも関わらず水野さんがチャットを

し続けたのは…。

彼女は不登校気味だったため、佐々木蓮が死んだことを知らなかったからだ。

佐々木蓮は水野さんの誤解を解くことも、しっかりと気持ちを伝えることもできないまま、彼女への思いをつづっている途中で亡くなった。

それを知らない彼女は佐々木蓮の態度に絶望し、「さようなら。」と打ってスマホ死することを決意した。

「…。」

佐々木蓮がスマホ死した理由ははっきりとはわからないが、なんとなく水野さん関係だと思う。彼もこの件で絶望しスマホ死しようとしたものの、きつと死ぬ寸前になって気持ちが変わったのだろう。なんとか手紙を書こうとしたが、間に合わずに死んでしまった。

佐々木蓮が高橋葵に告白したことになっているのはもっとわからないが、下の名前が同じというだけで噂がごちゃごちゃになったのかもしれない。

これですべての謎が解けた。すべてがつながった。この誰も幸せにならなかった事実を知っているのは僕だけ。だから僕にはやらなきゃいけないことがある。

普段運動をしないくせに全力疾走したので、すぐに息が切れた。でもここで止まるわけにはいかない。スマホを握りしめ、よたよたしながらも足を動かした。

この残酷な事実を、水野さんに伝えなきゃ。

佐々木蓮はあなたを本当に好きだった。でも彼はどうすでにこの世にいない。あなたと同じく「スマホ死」という悲しい選択をした。

腕に力が入らなくなり、ついついスマホを落としてしまいそうになるが、それでも抜けていく力を必死に抑え込み、なんとか走り続ける。

あの世で彼に会っても、どうか責めないでほしい。そして幸せになってほしい。スマホを受け取ったときから、水野さんが幸せになればいいなってずっと

思ってた。その気持ちだけが、あなたを殺す動力だった。だからどうか、お幸せに。

公園の入り口に着いた。さっきまで遊んでいる子供たちしかいなかったのに、公園のすみっこに人だかりができていた。

体にびりっと電流が走ったような衝撃を感じた。まさか。

公園に駆け込み、人がいるほうに走る。汗だくの体で人を押しのけながら前に行くと、最も恐れていたものが見えた。

水野さんが倒れていた。
濁った目で空を見つめて。

血の気のない真っ白な顔で。

スマホの電源ボタンを押してみる。画面は暗いままだった。

チャットアプリを閉じた瞬間に、ちょうど充電が切れたのかもしれない。何度押しても、やっぱり画

面はつかない。

「ああ……」

膝の力が抜け、全身から崩れ落ちた。

間に合わなかった。

逝ってしまう前に、真実を伝えてあげられなかった。

一体なにで死んだのだろうか。外傷はどこにもない。心臓麻痺だろうか。そういえば佐々木も心臓麻痺で亡くなったんだった。

どれほど苦しんだのだろうか。すぐに逝けたのかな。あれだけ望み、そして怖がっていた死は、一体どんなものだったの？ 苦しかった？ それとも思ったより楽だった？

ああ、水野さんが強いから、天国で佐々木と喧嘩になりそうだなあ。

天国で幸せになつてくれるといいなあ。ここでは、辛かったらうから。

もう彼女に僕から本当のことを言うことはできない。

「だったら言ってもいいよね。さっきまでは言わな
いようにしておこうと思ったけど。だってあなたが
このことを知る必要はないから。
でも、いいよね。」

「水野さん、好きです。どうかお幸せに。」

水野さんの目を、そっと閉じた。

公園のブランコで、一人の高校生が座っていた。
手にしたスマホをじっと見つめている。

「あの…。」

それを見ていた制服姿の女子が、ブランコに近づ
いて声をかけた。ブランコに座った高校生が、顔を
上げずに口を開く。

「…誰ですか？」

「あっ、私、高柳高校の雨宮です。制服一緒なので
同じ高校だと思うんですけど、お名前、聞いてもい
いですか？」

「…永瀬。」

「永瀬、くん？」

「そう。永瀬涼真です。」

涼真はようやく顔を上げ、薄く笑った。

「翅の音」

久保田 哲生

■受賞のコメント■

「自分語り」という言葉を、誰でも一回は聞いたことがあるのではないのでしょうか。そして言葉だけでなく、実際に誰かの「自分語り」に出会ったり、自身でも、あの時「自分語り」をしていたなあと、後から気が付いて反省したりすることも、少なからずあるのではないのでしょうか。今回書いた小説の主人公が、雌の蚊であるのも、そんな「自分語り」的な部分を、なるべく混ぜたくないと、私なりに考えた結果なのだろうと思います。

個人的には、もはやマイナスの意味で捉えている「自分語り」ですが、しかし内容や長さがどうであれ、「自分の経験やパーソナリティを整理して他の人に話す」という行動は、決して悪いことではなく、むしろ褒められるべき態度だといえます。就職活動が目前に迫った今、心の底からそう感じます。私も含め、いざという時「自分語り」ができない人は、傍目からは「腹の中では何を考えているのかわからない何か」、それこそ昆虫のようにも見えてしまうでしょう。

最後に、明治大学連合父母会の皆様、関係者の皆様に感謝を申し上げます。今年度の明治大学文学賞の佳作として私の作品が選ばれたことを、誠に嬉しく思っております。

翅の音

一

私たち「蚊」と呼ばれる生物には、半透明の大きな翅が二枚付いている。形は細長い楕円になっていて、それらが左右両方に真っ直ぐ広がっている。これらによって私たちは素早く、俊敏に飛ぶことができる。よって身体に伝わってくる振動も凄まじいものだ。しかしその揺れも、飛び始めてしばらくすれば慣れてきて、むしろ心地よいリズムに感じられなくなる。

私は蚊である。ある時このことに疑問を持ち、自分なぜ蚊であるのかということをし少し考えたことがあるが、すぐにやめてしまった。なぜなら「なぜ○○は○○なのか」という問いを思いついた時、その問いに納得のいく答えは得られないと、すぐに分かってしまったからだ。そのような疑問に答えられるほどの賢さを、私は兼ね備えていないし、十分な

時間もない。

とにかく私は蚊としてある時生まれ、ある程度生きてきた。今のところはそれで満足している。私にとってはそのことを考えるよりも、明日明後日の生活のほうが高重要度は高いのだ。

私の日々の生活はシンプルに言ってしまうえば、食事をして寝て起きて、そしてまた食事して寝るといったものだ。しかしその内容を詳しく見ていけば、私の生活がシンプルでも怠惰でもなく、むしろ豊かで複雑なものであると分かってもらえるだろう。適宜ほかの昆虫と比較し、いくつかの具体的なエピソードも交えながら見ていこう。

まず私たちを蚊として特徴付けている最大の生体は、やはり吸血行動にあると思う。ハチやアブのように、人間を針で刺し体内に毒素を送り込むという昆虫はたくさんいる。しかし私たち蚊は、確かに針のように尖った口を人間に刺すが、そこから何かを入れるのではなく、むしろ彼らの血をその体内から吸い上げるのだ。同じように針を刺しはするものの、

その目的が異なっている。私たちは栄養補給のため、彼らは防衛のために、人間を刺すのである。また詳しくは言えないが、私たちは刺す時に、痛くならないような心配りまでしている。対してあの粗野で乱暴な蜂たちにそんな気遣いができるだろうか。

唯一惜しむらくは、刺したところが腫れてかゆくなってしまうということだ。しかし、それもアブの噛み跡やスズメバチの毒に比べたら、そこまで有害なものではない。私たちの刺し跡なんて、葉など塗らなくても普通の人間であれば数日で、もしかしたら数時間で自然消滅してしまうようなものなのだ。

普通の人間といったが、その人間たちの私に対する反応は様々で、観察していると面白い。

ここでその例となる出来事を挙げておく。私はいつものように空腹を満たすために、血を吸う人間を選んでいた。最終的に一人の若い男に目標を定めて、私はその男の顔の周囲を飛び回ったが、彼は何やら様子が違っていた。普通はそんなことをすれば、多くの人間はみな、手を振り回して私たちを遠ざけよ

うとする。しかしその男はそんな素振りを見せず、私を目だけで追いかけて、ついに私が腕に留まり、血をいただこうとするときになっても、彼はただその光景を見つめていただけだった。

「……よく吸うなあ」

このようなケースは実は結構頻繁にあつて、そのたびに私はありがたくたつぷりと血液をもらうようにしている。大抵の人間は私を嫌がるので、このような人間がいるのは奇妙だが、しかし興味深くもある。

もう一つ私の吸血行動、いわば食事に対する姿勢を、一人の人間の例を挙げながら紹介しよう。

ある夜、寝ぼけながら飛んでいると、無意識のうちに私は、熱気のもった脂のにおいに誘われて、闇夜に明るく光っているとある飲食店に迷い込んだ。店内のカウンターはL字型になっていて、等間隔に並べられた椅子に、何人かが一、二席ほど空けて座っていた。

その中でも特に大きな体をした、滝のような汗を

かいている男に目が留まる。

「ラーメン並盛、あと半ライスください」

男は顔と首周りの汗を、小さいよれよれのハンカチでふき取っていた。コップの水を渡されてすぐに飲み干しているところを見ると、かなり腹が減っていたのだろう。

私は血を吸うこと、それだけを食事だとは思っていない。私が空腹を感じたその瞬間から、すでに食事は始まっているのだ。腹を空かしながらもそれを我慢して、汗と鉄分のおいを探す時間は、かなりストレスフルなものだ。しかしその間高まっていく期待感は、本来ならば卑しい吸血行為を、清く正しく行いへと昇華してくれる。

「はい、ラーメンお待ちどうぞ」

「あざっす」

男は店員からカウンター越しに渡された丼を受け取り、自分のほうへ寄せるやいなや、勢いにまかせてそれを貪り始めた。味わって食べるというより、むしろ食べ物を口に運び、それを喉の奥に流し込ん

でいるようにしか見えなかった。

私のようなグルメならば、人間の外見を見ただけで、大体の血の味の予想をつけることができる。例えば、小さい子供の血は弾力があり、のど越しがすっきりとしていて、嫌な後味がない。対して年寄りの血は大抵、味が薄くて、パンチに欠ける。男性と女性ではあまり差はない。この汗だく男のような、太った人間の血は大抵生ぬるくて、苦みがある等々。挙げていけばきりがなく、すべての場合にこの統計が当てはまるとは限らない。しかし私のこれまでの経験から、見た目と血の味の間には、ある程度の相関関係があることは認めざるを得ないだろうと思う。

男は頭を激しく上下させながら、目の前の食べ物をお口の中に詰め込んでいた。どうやら食べるのに夢中で、すぐ後ろにいる私の存在に気づいていないようだ。その時私はそこまで空腹ではなかったが、もたえるものはもたっておこうと思いい、その男の首筋辺りに狙いを定めた。そしてその粘っこい皮膚にま

るで注射でも打つかのように、細長い口を差し込む。毛細血管から少量の血液を吸い上げる。ドロドロしていて嫌な酸味を感じる味だった。

「ごちそうさまでした」

再びコップの水を一気に飲み干すと、男はすばやく立ち上がった。そして首の後ろを搔きながらそそくさと店を出ていった。

今でもこの男の、厚ぼったい皮膚と巨大な肉体が印象に残っているが、それに比べて私の身体は、細かい繊維を適当に集めて結び目にしたような形をしている。

例えば、翅や脚、口などは四方八方に飛び出ているように見えるし、身体のバランスはあまり良いとは言えない。しかし大まかに見れば、他の昆虫、カブトムシやセミ、ハチなどとその構造は変わらない。頭、胴体、腹があつて、胴体には六本の脚と二枚の翅がくっついている。それに加えて頭には二本の触角がある。そして私にとつては、この部位が最も重要である。なぜならにおいや振動、さらには温度と

いった視覚以外のすべての感覚を、この二本の触角だけで司っているからだ。

人間にも様々な体型や顔の種類があるように、私たちも個体によってそれぞれ違った表情を持っている。一見同じように見えても、よく観察すると一匹一匹に個性があることがわかる。例えば、くるくるいつまでも同じところを飛んでいる蚊もいれば、一直線にしか飛ばないものもいる。口がやたら太いのがあれば、背中の模様が黄色っぽいものもいる。

しかし結局、私も彼らも皆もれなく「蚊」という種であることに変わりはない。だから私たちの見分けがつかないのは無理のないことだろう。

特に許すことのできないのは、私たちをハエと見間違えることだ。私は「ハエ」と呼ばれる彼らを、同じ昆虫ながらも軽蔑する。彼らは強いにおいの発するものならば、なんにでもたかり、その汚らしい足と口であらゆるものを汚していく。一度、彼らが鳩の死骸に群がっているのを見たことがあるが、ひどいありさまだった。ただでさえ目を伏せなくなる

ような動物の亡骸に、彼らがたかっているのを見ると、身震いが止まらなかつた。彼らには腐乱臭と花の香りの区別さえついていないのだろう。

私たち蚊が日頃から人間と正々堂々と命と血液のやり取りをしているのに対し、ハエは自分より大きいものにおびえながらコソコソと飛び回っている。そしてそれがどんなに汚いゴミであろうと、ひとたび栄養になると分かれれば、群れをなしてたかる。生物としての誇りや尊厳を、彼らは遠い昔に捨ててしまったのだろうか。

また、ハエの生に対する執着はすさまじいものである。その証拠に、彼らは圧倒的な動体視力と生命力を生まれながらに持っている。特に反射速度はずば抜けていて、この世界に彼らの反射神経で避けられないものは存在しないだろう。

よってハエは卑しい昆虫ではあるが、いくつかの性能の点では、彼らのほうが私たちより優れていると認めざるを得ない。しかし彼らの生き様が、私はどうしても気に食わないのである。

確かに蚊とハエを比べれば、あまり差はないように思えるし、どちらもただの羽虫であることに変わりはない。だがそれは「蚊」と「ハエ」という種を比べた場合である。私は自分が、そこのハエや他の蚊たちとも全く違った、一匹の個性であると断言できる。なぜなら私には趣味があるからだ。

私は飛ぶのが好きだ。私たちにとつて飛ぶことは、人間でいう呼吸のようなものだから、それを趣味だというのは少し奇妙に思われるかもしれない。それでも、飛んでいるときの気持ちよさは、何物にも代え難い。速く飛ばせばその分疲れるが、同時にそれに見合う爽快感がある。人間のような重い肉体に縛られることもなく、軽く脆い体を、二枚の羽根だけで支える。その翅と胴体をつないでいるのは、ただの関節である。

難しいことは何も考えなくていい。ただ飛ばうとそう思った瞬間、すでに空中に羽ばたいている。自らの発生させる心地よい羽根の振動に身を任せ、縦横無尽に飛び回るのだ。急旋回やとんぼ返りもお手

の物である。ハエにこんな芸当ができるだろうか。チヨウの優雅さとハチの鋭さを兼ね備えた、私だけに許されたかけがえのない飛行方法である。

飛ぶのはかなりのエネルギーが必要で、飛び終わった後は必ずと言っていいほど腹が減っている。だから無駄に飛び回るのはあまり賢くはない。しかし飛んでいるときだけは、頭を働かせなくていいので、いいリフレッシュになる。強いて考えていることといえ、ただ羽根を絶え間なく動かすことだけである。

人間の愚鈍な腕では私のスピードにはついて来ることにはできない。彼らが腕を振りかぶった瞬間には、こちらはまだ逃げ遅れる準備が万端である。彼らはいつも全力で私を潰しに来るが、私にはその動きすべてがスローモーションに見える。そして何も留まっていないう腕や足や顔を自分で叩いている姿は、滑稽以外の何物でもない。

大気中は、人間の目には見えないが、蚊の触角ならば感じ取ることのできる、微弱な空気の流れで満

ち溢れている。私はそれらを利用することによって、本来ならば実現不可能であった速度と飛行技術を手に入れた。そして、まるで百戦錬磨のエアスパイロットのように、風の助けを借りて自由自在に空を飛び回ることができる。

ここで、私の飛行テクニクにまつわる一つの出来事を例に挙げる。

夏の盛りの、日差しの強い日だった。午後になってから雨が降ってきた。灰色の雨雲から何の前触れもなしに大量の水滴が落ちてきたのだ。私は突然降ってきた雨をしのげそうなところを探し、そしてある一軒家の窓を見つけた。網戸というのは大抵どこかに大きい穴があるものだが、その家の窓にも、右の方には蚊一匹通れるくらいの穴を見つけた。

中に入ると一人の中年男がソファに座り、新聞を読んでいた。私は食事をしたばかりで満腹だったが、腹ごなしの運動をしようと思いついた。

感覚を研ぎ澄まし、十分な観察と緻密な計算によって空間を把握する。室内は外よりも空気の流れが

複雑で、特に空調の効いている部屋はその流れを讀むのが難しい。

私はわざとその男の耳元を通り抜ける。男は右腕を頭の横で振り回した。

「もうそんな季節か」

男は新聞をテーブルに置き、立ち上がった。まずはつま先を刺す。男がそこを叩くために腰をかかめると、シャツの襟からうなじが表れる。私は上昇してそのあらわになった首を刺す。次は男の鼻先から少し離れたところでホバリングする。男は両手を顔の正面で打ち合わせたが、むしろその腕の動きで起こった空気の渦に体を任せて、私はそれを避けた。

「くそっ」

男の目の前で減速し、クーラーの風に乗って急加速する。そのように緩急をつけて、むき出しの肌という肌を刺しまくった。男ははしきりに前腕や脛を叩いていたが、私を捉えるには動きが遅すぎた。

最後に私は大胆にも額の真ん中に着地した。手足と違って顔の場合は、人間は叩く前に少し躊躇する。

だからこの行動は大胆に見えるかもしれないが、実は顔を刺すのが一番安全なのだ。

狙いをすましているのか男はじっとして、右の手のひらを額にかざした。そしてその手が動いたのと同時に、私は飛び上がった。男が自分の額を思いっきり叩いているとき、私はすでに遠く離れたところにいた。

「かゆいな、ちくしょう」

男は諦めた様子で、再びソファに腰を下ろし、額が真っ赤なまま新聞を讀み始めた。しかしそれでも時々、きよろきよろしたり、テーブルを叩いたり、二の腕をはいたりしていた。どうやら彼にはまだ私の幻覚が見えているらしい。その姿は、まるでタンバリンを鳴らしながら踊っているようだった。

私はもう満足して、休みがてらその光景を天井から見下ろしていた。男は落ち着いてくると腕をかきむしりながら別の部屋に行き、手に殺虫スプレーを持って戻ってきた。そうなると私にはもう手の打ちようがない。

ちよūdō雨も止んだようなので、先ほど入ってきた網戸の隙間から外へ出た。振り向いて見ると、男は蚊のいなくなつた部屋に、煙が充満するまでスプレーを噴射していた。

様々な昆虫、何人かの人間との出来事を挙げて、私が日頃どのような生活を送っているかを語ってきた。最後にその昆虫の中でも、私が勝手に変な親しみを感じている「セミ」についてのエピソードを少し紹介しておきたい。

セミというのはその一生の大半を土の中で暮らし、地上に出て成虫になってからは、一週間程度しか生きられないという。だから彼らは地上にいる間は、見境なくあらゆる方向に飛び回り、体内に溜まったエネルギーを発散するのだ。そして偶然ぶつかった塀や樹木にしがみつくと、それに飽きるとまた飛びまぐる。そしてその一週間が過ぎると飛べなくなり、腹を仰向けにしたまま、地面にその翅と体を叩きつけ、無様に足掻きながら死んでいく。

しかし私はそんなセミの不思議な一瞬を目撃した

ことがある。

ある時、私はうつそうとした雑木林に迷い込んだ。もう真夜中だったのでそこが雑木林であることにも最初は気が付かなかった。しかしやけに涼しいのと、腐葉土の強いにおいで、どこかの林であることがすぐに分かった。その夜は、灰色の分厚い雲が空を覆っていて、月も星も見えなかった。

私はその木々の間をすり抜けるように飛んでいたが、ふと、とある木の根元に目が留まった。何かが淡く光っているのが見えた。土や樹木のなかで、そのぼやけた緑色はあまりにも異様で不気味に見えた。その時の私はそれが何の昆虫なのか、ましてや何の生物なのか、見当さえつかなかった。しかし、その奇妙な発光体は暗闇の中で妖精のように輝いており、私はしばらくの間見とれてしまった。

「全然いないな、カブトムシ」

「もうちよい奥行ってみるか」

見とれている間に、二人の少年が草をかき分け、懐中電灯の強い光を前方に向けながら現れた。私は

この静かな空間を邪魔されなくなかった。加えて、あの殻を破りかけの生物の一部始終を最後まで見守りたかった。よって私は、二人の少年があゝの根元に近づいてくる前に手を打った。

「うわっ、蚊だ」

少年は自分の左腕を右手で叩いたが、私はそれを難なく避ける。そしてそうしている間にすぎま脛を刺す。少年は掌で思いつき叩くが、私はすでにもう片方の手に乗っていた。そして、その中指の第二関節を刺す。その次は脇の下を刺した。子供はのろいくせに血の味は旨いので、私はいつも好んで吸っている。

「変なところばかり刺しやがって」

「もう遅いし帰ろうぜ」

少年たちはもと来た道へ、草むらを短い足でまたいで戻っていった。それを確認すると、私は急いであの発光体のところへ戻った。

消え去っていく雲間から、いびつな欠け方をした月が、顔をのぞかせ始めた。その生物は殻を完全に

脱ぎ切つて、すぐ上のところに輝きながらじつとしていた。私はその時初めてその発光体がセミであることに気がつく。

胴体からはみ出すほど長い翅、飛び出した真つ黒な眼球、体の構造は成虫のセミと全く同じだった。唯一違うのはそれが茶色ではなく、淡い薄緑色であるということだ。私は、そのぼんやりとした輝きから目を離すことができなかった。

月明りが枝葉の隙間から、私たちのいるところを照らした。上空には天の川銀河が横たわっていて、星々がその周りのいたるところに散らばっていた。視界は徐々に優しい光でいっぱいになって、私はいつの間にか眠りに落ちていた。

地面からの熱気を感じて目が覚めた。早朝の薄明りの中で木の根元を見ると、もうあのセミはいなかった。私が眠っている間に、どこかへ飛んで行ってしまったようだ。そこにあるのは、薄茶色の丸っこい抜け殻だけだった。その背中の裂け目には、白い糸のようなものがひらひらとくっついていていた。

この出来事は、私の日常生活の中で、そして浅い記憶の中で、未だに異様な輝きを放っている。

長い幼虫の期間を暗い土の中で暮らし、地上に出て成虫になってからは、その限られた命を飛ぶことだけに費やす。私はそんな彼らの運命に同情したり、憐れんだりはしない。それはただの生態に過ぎないからだ。しかし幼虫から成虫に生まれ変わるあの一瞬、あの輝きだけは、彼らの一生の中で特別に美しいひとときだと、今でも思っている。

それ以来、公園や林の中で必死に飛び回っているセミを、私は複雑な思いで眺めるようになった。

二

ある時点を境にして、私の記憶は霧に包まれたようになっている。それ以前のことは、はっきりと思い出すことができない。断片的なイメージが浮かんで消えていくばかりで、それらが明確な関連性を

もつことはなかった。

私はただの一匹の虫だった。花の蜜や樹液ばかり吸って、やみくもに飛び回っていた。触角は機能していたが、それによって受け取る感覚を意識することとはなかった。ただ外界の刺激を感覚し単純に反応する、私が覚えているのは、たったこれだけのことだ。

変化が訪れたのは、あの女性の血を吸ってからのことである。

それはまるで、深い眠りから覚めて、未だ夢心地のなかにいるような気分だった。今になってわかるが、そこは病院だった。急に視野が広がって、においや振動、光がやけに強く感じた。腹はすでに血で満たされていた。そして、私の目の前に横たわっている人間、言い換えれば、その血液の持ち主に目が留まる。

その女性はびくともしないまま、薄い布団をかけて、ベッドの上に横たわっていた。虚ろな瞳を天井に向け、時々ゆつくりとまばたきをした。脂や

汗のにおいはあまりしなかった。部屋は全体的に白く、いくつかの蛍光灯が、硬いベッドとその上に寝ている人間に、黄ばんだ光を照らしていた。そして私はなぜだか、その女性からは何か大きなものが失われているような気がした。

彼女はじっと天井を見つめている。

「……」

すると白い服を着た女性が、足早にドアの前を通り過ぎながら、廊下から部屋の中を覗き見た。そしてその女性は病室に入ってきた。

「どうかしましたか」

彼女はベッドの女性の近くに寄り、その無表情な顔に耳を寄せる。ベッドの女性は相変わらず天井を見つめている。すると彼女は部屋から出ていった。しばらくするともう一人、白い服を着た男性が入ってきた。今思えば、この男性は主治医か何かで、もう一人は看護師だったのだろう。その医者は、先ほど看護師がしたように、ベッドの女性の顔に耳を寄せた。

「……」

「大丈夫ですよ。心配しないでください」

医者はベッドの女性の肩を軽く撫でた。

「少し空気を入れ替えましょう」

そして窓の方へ行き、半開きだったガラス窓を全開にした。医者と看護師は密かに話し合っていた。

その二人がベッドの女性に挨拶をして部屋を出ていく途中、彼らの顔はそれまで浮かべていた微笑から、何か深刻そうな表情に変わっていた。一人取り残された女性は、再び天井を生気のない目で見つめていた。そして、静かに目を閉じた。

この部屋、その中央にいる無表情の女性、そして今の一連の出来事の不吉な雰囲気、私は急に恐ろしくなり、全開になった窓から、逃げるように外へ飛んでいった。

外に出てからまず驚いたのは、太陽のまぶしさだった。蛍光灯の光とは比べ物にならないほどの明るさだったので、私の目はくらんだ。

それからの私は、先ほど語ったようなのんきな生

活を続けているのだった。しかし客観的に見れば、この出来事の前と後では、私に大きな変化は起こっていない。しいて言えば、花の蜜ではなく血を吸うようになったのと、あれこれ考えるようになったのが大きな違いといえるだろう。

突然あの女性のことを思い出したのは、自分でも少し不思議に思った。目を覚ます前の一瞬のうちに、それらの光景が脳裏に浮かんできたが、すぐさま消えてしまった。

その日は朝から、何だか身体が重いような気がして、心なしか翅の動きも何となく鈍く感じた。目覚めも悪かったので、結局何もしないまま昼までぼんやりしていた。しかし、私はそれらの不調をあまり気に留めずに、そのまま昼食に出掛けて行った。

太陽はすでに頭上に昇っていて、その強い日差しに目がくらみそうになった。風も弱く、湿度も高いので、雲一つない青空が、今はとても窮屈に感じる。

私は少し高度を下げて飛ぶことにした。地面に近づくと、空気がざらついてくるのを感じる。

アスファルトからの熱気もより一層強まった。等間隔に並ぶ電信柱に沿って飛んでいると、ある一軒家を見つけた。一階の窓は開いている。ぼんやりとした意識をかるうじて保ちながら、私はその家に侵入した。

部屋自体は広いが、壁沿いに置かれた家具が、全体的に狭苦しい印象を与えていた。冷房のよく効いた部屋である。体温が徐々に下がっていくのが心地よかった。特に変わったところは無いが、壁や床のいたるところに、この住人たちの生活がしみこんでいるようで、何となく親近感を持った。

中には女性と少女がいた。母親とその娘だろうか。中央にテーブルがあり、娘はその椅子に座っていた。椅子が少し高いようで、彼女の足はフロアリングについていない。娘は足を退屈そうにぶらぶらさせていた。キッチンには部屋を見渡せる位置にあった。母親はそこに立ってコンロ周りを整理していた。

「あつーい、クーラー下げて」

娘は涼しげな格好で、そうめんを食べていた。

「十分下げてるわよ」

母親は手を止めることもなく、作業に集中していた。

娘は相変わらずそうめんをすすりながら、テレビを見ていた。一定のリズムで吹きつける扇風機の風が、少女の耳の横にかかる髪を揺らした。

「午後からプールに行くんじゃないの。早く食べちゃいなさい」

「わかってるよ、もう」

娘は残りのそうめんを平らげて、勢いよくつけ汁まで飲み干した。椅子から飛び降りると、床に放り出してあった明るい色合いのカバンを拾い上げ、玄関へ駆け出して行った。

「ごちそうさま。行ってきまーす」

「ちよつと待って」

母親はエプロンで手についた洗剤をぬぐいながら、娘を追いかけた。

「ちゃんと虫よけしないと」

「いやだよ、くさいもん」

「おりやつ」

母親は愉快そうに、娘の額の近くにひと噴き、虫よけスプレーをかけた。娘は鬱陶しそうにしながらも、それを一緒になって面白がっているようだった。二人の少女が薄暗い玄関で仲良くじゃれあっていた。

「いつてきまーす」

「いつてらっしやい」

娘はサンダルをつま先に引っ掛けながら、重いドアを両腕で押して出かけて行った。母親は少し寂しそうにしながらも、娘を見送った後、中途半端に開いたドアを閉め、呆れたように微笑していた。彼女は部屋に戻ると、つけたばなしのテレビを消し、テーブルの食器を片付けて、キッチンに戻って中断していた作業を続けた。

この親子を眺めている間、私の中に、明るい幸せと深い悲しみが同時に浮かんできた。そして一瞬のうちにはそれらの感情は消え去った。ただ、私はこの母親から血を盗むのが申し訳なくなつて、空腹のま

ま、入ってきた窓の隙間からふらふらと出ていった。それからまた別の場所を探そうとしたが、強い日差しのためか、急に疲労を感じたので少し休むことにした。涼しい葉陰に潜んで体力が回復するのを待った。

気づけば、すでに日は落ちかかっていた。飛ぶのにちようにどいい気温になっていたので、私は焦りながら出発した。

いつもより速く飛んでいると、とあるアパートの換気扇を見つけた。カビ臭い風が吹きつけるが、私はそれに逆らって部屋の中に侵入した。

その部屋は蒸し暑く、古い扇風機の雑な風が、空気中の埃をかき混ぜていた。厚いカーテンの隙間から、細長い夕焼けの光が斜めに差し込んでいた。部屋中にはごみが散乱しており、その強烈なおおい引き付けられたハエが何匹か飛んでいた。

そのゴミに囲まれて、一人の人間が横たわっていた。よれたTシャツの裾からへそがはみ出している。まるでこの男もこの部屋のゴミの一部であるかのよう

うに見えた。

私は一刻も早くこの汚らしい部屋を出たくてたまらなかったが、その焦りに反して、空腹はますます激しくなっていくばかりだった。長居はせずに、少し血を吸ったらすぐに他へ移動しようと決めた。

男は仰向けになりながら携帯をいじっていた。小さいスクリーンの薄明りが、無表情の顔を照らしていた。このような場合は、画面の陰になっている裏側の指が狙いやすい。

頭がぼんやりしてきた。私は一直線にその男の手に近づき、その毛深い手の甲に着地する。血は外見通りどろどろしていて、鉄分をあまり感じなかった。

男が私に気が付いたので、吸血を中断して手から離れる。男は携帯を持ったままの手を、それとは逆の手で激しく叩いた。

「くそが」

部屋が一気に明るくなる。私はいつものようにそれを避けたつもりだった。攻撃を避ける時には、必ず十分な間隔を取るようになっている。手に当たらな

いのはもちろんだが、腕を振ったことで起こる風圧に、身体のバランスを乱されるのを警戒してのことだった。

だからその日は、不運な条件が重なってしまっていたのだろう。腹の中の違和感、扇風機の風向き、空腹と疲労、母親と娘。

攻撃は当たらなかつた。しかし手を振り回したことにより起こった風に、一瞬姿勢を崩してしまつた。次の瞬間、私はこのようなイレギュラーに対する自らの弱さを痛感することになる。

私はその時、男の腕の射程範囲にある真っ白な壁に、軽率にも留まつてしまつた。そしてそれに伴つて、野生の研ぎ澄まされた感覚が、二本の触角に蘇つた。視界が少し暗くなり、背後からの視線を瞬時に感じとる。

私はその壁から弾き出るように飛び立つた。それと同時に、狙いをすました男の手のひらは、コンマ一秒前まで私が留まつていた場所を強くたたいた。伸びた爪の先が私の後ろ脚をかすめる。その一撃に

は男の全体重が乗つていたため、部屋の大気全体が激しく振動した。

私はその振動に強いめまいを覚えながらも、網戸の穴の広がつているところを見つけ、一目散にその穴から外へ逃げた。

「逃がしたか」

過剰に鋭くなつた触角が、背後に遠のいていく部屋の照明が消えて、重い体が畳に沈み込むのを感じとつた。外は蒸し暑かつた。体の震えは止まらなかつたが、これは翅のはばたきによるものではなかつた。

右の後ろ脚が、真ん中でぼつきりと折れてしまつた。辛うじてつながつてはいたが、外側の足は意思なくぶら下がっているだけで邪魔だったので、自分でちぎつて途中で振り落としてしまつた。

しかし足のことはあまり気にしていなかつた。私は、今生きていることが奇跡のように思えた。あと少し反応が遅れていたら、私は今頃あのゴミの山の谷間に墜ちていたことだろう。それを考えると、恐

怖と驚きで翅の動きはいつまでも安定しなかった。

私は、薄暗い電灯が寂しく立っている公園まで飛んで、その適当な木の幹にしがみついた。

死にかけての経験はこれが初めてだった。人間の射程外にまで逃げることは、今まで無意識にやっていたことだから、安易に壁に留まってしばらくは、自分の犯しているミスに気が付かなかったのだ。私はいつもなら避けられたはずの攻撃を、完璧に避けることができなかつた原因を考える。そして私は、朝起きた時と同じく、身体の動きが少し鈍いことに気が付いた。身体が重いのは朝起きた時にはいつものことで、飛び始めればすぐに調子を取り戻していた。だからあまり気には留めていなかったが、しかし夜になった今も、翅の付け根の挙動に違和感がある。加えて腹には、血を吸った時とは違う圧迫感もあった。

ようやく気分が落ち着いてきたとき、弱い風が私の右後ろの空間を通過していった。欠けた所はがらんとしており、関節の裂け目が無様に尖っていた。

夜風を浴びながら、静かな気分で木肌を見つめていると、急に眠気が襲ってきた。私は幹を少し登り、枝が密集しているところに隠れて眠りに落ちた。

浅い眠りから目が覚める。一瞬自分がどこにいるかわからなくなかつたが、すぐに昨夜の出来事と失った後ろのことを思い出す。

私は別の場所に移動しようと飛び立つ。やはり、以前のようにまっすぐには飛べなくなっている。ただ翅を動かしているだけでは、進路がどうしても左斜め上に偏ってしまう。翅の動きを微調整しながら、どうにか道端のフェンスに着陸することができた。錆び付いたフェンスには青いアサガオが絡みついていた。

当分の間は血を吸いに行くことはできないだろう。まずは一から飛ぶことに慣れなければならぬ。再び問題なく飛べるようになるまでは、花の蜜や樹液でしのぐしかないだろう。しかしそれらでは活動に必要なエネルギーを得られない。できるだけ早く飛べるようにしないとイケない。加えて、私は花の蜜

の味があまり好きではない。それを味わうと、ただの虫けらに戻ってしまうような気がするからだ。

場所を変えようと出発する。空のいたるところでセミが自由に飛んでいる。私の身体は左に傾く。翅の動きを調節する。

不意に、昨日までの、何も考えず呑気に飛んでいた時を思い出した。そして飛ぶことに四苦八苦している私の姿が、急にみじめなものに思えてきた。

すると突然私は激しい苛立ちと怒りを覚え、コンクリートの壁に猛スピードで突進し、全身を強打した。翅を千切れるほど動かすと、その場で中途半端な楕円を描いて左回りに飛び続けた。怒りが収まるまで、私はいたるところに自分の身体を叩きつけた。最後には疲れてしまつて、すぐに自分の無力さのみじめさを痛感した。私は、痛めつけたところで何の変化もない身体を運びながら、落ち葉で陰になっているところを見つけ、そこに向かって力なく墜落していった。

まだ緑色が残っている葉っぱの陰に隠れて、昨日

までの自分がいかに幸福だったかを考える。そして私の飛行の背景でしかなかった景色が、今では手の届かない輝きを伴って脳裏に浮かんできた。日光を反射する雑草の緑、夕焼けに染まる積乱雲の輪郭、熱くなった翅を優しくなでる夜風。

不安と後悔が翅の上に重くのしかかつて、ついに私は動けなくなった。脚で支えているのも億劫になつて、五本の足を放りだして横になった。その時、折れ曲がる翅の反発を感じたが、気にせずそのまま倒れた。

何かミスをしたり、いつもとは違うことをしたりすると、それがどんなに些細なことでも尾を引いてしまい、その後の行動に良からぬ影響が出る。自分の知らないところで、小さな悪影響は徐々に積み重なっていく。そして気付いた時には、すでに取り返しがつかなくなつており、最後には私のささやかな、頼りない基盤に支えられている生活を破壊してしまふ。

三

あれからどれほどの時間がたったのだろうか。ここでは空気の流れ、気温、において、外界の様子を知る手掛かりとなる、あらゆる振動が静止している。

以前のように飛ぶことができないのは、明らかだった。そうなればもちろん、気軽に血を吸うこともできなくなる。こんな状態で人間の前に姿をさらせば、たやすく撃ち墜とされてしまうだろう。

新しい飛び方に慣れる時間ももちろんなかった。なぜなら、空腹になるのが早まっているような気がしたからだ。今はもう飛ぶのをやめてしまったから、それまで飛行に使われていたエネルギーで、少しでも生き永らえようと思っていたのだが、その蓄えはすぐになくなってしまった。もし飛行練習でもしていたら、より空腹はひどくなって、その途中で餓死していたことだろう。また、風も恐ろしくなった。

あの時のようにバランスを崩してしまうのが怖かったのだ。

下手に飛ぼうと、飢えに苦しもうと、同じ結末を迎えることになる。ならば、私はより長く生命を維持できる方を選ぶ。最後のコンマ一秒までこの命にしがみついてやろうと決意した。

私が望むのはただ穏やかに、静かに、誰にも気づかれずに消えていくことだ。ここにいれば誰の邪魔もせず、そして誰にも邪魔されずに、その願いが叶えられるはずだ。私はより一層手足を内側に折りたたむようにして眠った。

何となく他の蚊たちのことを考えていた。まだ空を自由に飛んでいた頃、私はたまに出くわすと、彼らをよく観察していた。その結果、はたして彼らにはただ原始的な、動物的な本能しか備わっていないことがわかった。

彼らには死を恐れるということがない。たしかに血を吸わなければ私たちは生きていけない。しかしその行為には、飢えを満たすということとは釣り合

わないくらいのリスクがある。血を吸いに行けば、必ずそこには殺意に満ちた眼差しと、巨大な掌がある。

私の脳裏には無残にもつぶされ、黒い塊と化した彼らの幻影がこびりついて離れない。彼らは、未だに自分が死んだことに気づいていないだろう。そもそも、その時自分が生きていたことにさえ、気づいていないかもしれない。

しかし、そんな彼らが羨ましい時もあった。私は落ち葉の下で無様に生き延びている。しかしその代わりに、腹が減り、死を恐れ、怒りや悲しみを感じ、四六時中自身の本能に抗うことになった。対して彼らは飢えの苦しみを知らなかった。人間におびえることもなかった。ただ腹を満たすことを考え、交配の相手を探し、最後まで自分という存在の自覚も持つことがなかった。なんて単純で、素朴で、それ以上ないくらい幸福な生涯だろう。

ついに耐え切れなくなり、私は明日にでも外に出て、道行く人の腕にとまって、その人間に潰しても

らおうと決意した。しかし私は同じような決心を、すでに何十回もしている。腹の中で何かがうごめくのを感じた。

飛ぶことに替わる、今の私のささやかな楽しみは、想像の世界へ行き、その世界の美しい絵画的な風景を眺めることだった。思考の悪循環に疲れ果てて、眠りに落ちるその束の間、私の想像力はあらゆる限界を超えて働き始める。しかし目が覚めてしまえば、その世界の景色は色褪せていき、すべてが無意味になった。

もう何も考えたくなかった。無心になろうとすればするほど、思考は加速していった。後ろ脚は、それを治すのに必要な栄養もないため、腐敗していった。腐食が進んでいくのと同時に、腹の中で、私の意思とは関係なく何かが発達していく。腐敗と膨張、その両方の感覚がとも嫌でたまらなかった。

今まで飛行に使われていた分のエネルギーが、別のことに使われ始めたのだ。それは傷口の修理や、生命を維持することよりも優先されたい。しか

し脚の腐敗が腹まで侵食してくれば、結局すべて意味のないことだった。

私は再び考えるのが面倒になったが、そうかといつてすぐに眠ることもできず、ただ時間が過ぎるのを待っていた。

私の眠りは、気絶することと何も変わらなかつた。知らないうちに意識が飛び、知らないうちに目が覚める。その後は、落ち葉に囲われたまま、長い自己嫌悪と後悔の連鎖反応が始まるのだ。

―雨あがりの午後、太陽が再び現れ、アスファルトに染みこんだ雨水が蒸発するのを、紫陽花の上で感じ取る。

ある時、私の身体は白いじめじめしたものに包まれていた。あまりにじつとし過ぎたため、身体にカビが生え始めたのだ。私はぎよつとして反射的に翅を動かし、五本の脚をじたばたさせた。カビは周りに散らばったが、私はそのままにした。脚を動かしなさいで、忘れかけていた後ろ足の腐敗を、はつきりと感じとつた。

―夕暮れの太陽は、発達した入道雲の凹凸や、その複雑なディテールを描き出した。

私は自分の身体の醜さを思い知った。細長い口には細かい繊毛のようなものがびっしりと生えており、誇りに思っていた触角も、自分がただの虫であることを突き付けられているようで嫌いになった。翅も中途半端に透明で、濁った古ガラスみたいだった。そんな自分の醜さも知らず、平気で人間の周りを飛び回っていたのかと思うと、もうこれ以上生き延びることはできないと思った。

―私はあの時のセミになっていた。今まさに長い土の中の生活に別れを告げて、生涯の輝かしい一瞬の喜びを噛みしめていた。

自分が駆除されるときのことを妄想する。まずはたつぷりと血を吸ってやって、そして潰された時に、その血のすべてが、張りつめた腹から弾け出るようにしよう。もぎれて、ぐしゃぐしゃになって飛び散っている翅が、真っ赤な血に染まっているのを想像する。すると私の中に隠れていた被虐意識が刺激さ

れて、ひどく興奮した。それでもすぐにみじめになつて、その妄想をやめた。

ついに私は夢を見ることもできなくなった。今では考える体力すらもなくなつて、想像の世界に逃避することもできない。唯一の救いであつた眠りの時間を、私は意識することができなくなつていた。しかし寝ても覚めても、目の前が暗闇であることに変わりはない。視界は真つ暗なままだつた。

この地獄はいつまで続くのだろう。粘っこいカビが再び私の周りで繁殖し始めたが、もうそれを取り払うほどの気力は残つていなかった。

そして私の悩みの日々は、あつけなく終わりを迎える。相変わらず陰鬱な気持ちのまま絶望していたが、そんな私の気分や意思は全く関係なかつた。そして長い静止期間を破り、私の身体はカビの膜を破り、湿つた暗闇から抜け出したのだつた。私を隠していた落ち葉の周りには、同じような乾いた茶色の枯れ葉が、互いに重なり合つていた。

突然思い立ったり、気力が戻つてきたりしたわけ

ではない。その時の私の状態は、あの女性の血を吸う前の、ただの羽虫だつた頃の状态と酷似していた。そして二枚の薄汚れた翅は、私の重い体を、とある路地裏の濁つた水溜まりまで運んでいった。なぜだか、私は以前そこに来たことがあるような気がして、とても懐かしい気分になつた。

この時しかるべき場所にたどり着けたのは、私の経験のおかげでも、知識のおかげでもなかつた。それは何者かに操られているかのように、シンプルに、規則的に終えられた。私は何も考える必要がなかつた。生まれた時にすでに身体に組み込まれていたプログラムが、単純に作動しただけのことだつたからだ。

それを終えると、ふと、少し遠くへ飛んでみようと思つた。私は自分を奮い立たせ、久しぶりに明確な意思を持つて翅を動かす。すると、案外楽に飛べるようになっていて驚いた。身体が軽くなつたおかげだろうか。

気がつくくと、私は海まで来ていた。初秋の少し冷

たい空気と、磯のにおいを含んだ海風が二枚の翅に吹きつける。夕日は沈みかけていたが、そのありあまる明るさを水平線に向けて放ち、空に緩やかなグラデーションを拡げていた。波はそれに応えるように、一定の間隔で浜辺に訪れては、その度に沖へ戻っていく。私はその繰り返しを無心で眺めていた。落ち葉の下で過度に美化された風景よりも、この目の前の景色のほうが、よほど自然で、美しいと感じた。

そして遠くの方を見ると、二人の、中学生くらいの少女の姿が目に入った。一人は黒髪が特徴的で、肩に長い髪をなびかせていた。その少女は、濃い青色のワンピースを着て縮こまって座っている。もう一人は、髪は黒く短いけれども、黒髪の少女より身長が高いように見えた。涼しげな服装からは、形のいい手足と肌が輝いていた。

短髪の少女は波打ち際の近くにいます。対して黒髪の少女は、そこから少し離れたところに座っていた。二つの長い影が砂浜に伸びている。

私は気づかれないように、この二人のいるところに近づいた。そして、座っている少女の横顔を眺める。風が吹くたび、丸く白い耳が黒髪の間から見え隠れする。あたりが暗くなるにつれて、その血色のいい頬は、次第に輝きを増していくように思えた。群青色のワンピースの袖からは、華奢な二の腕がのびて、柔らかく両膝を抱えている。

渚の方を見ると、短髪の少女の姿は、逆光のシルエットになっていた。細長い脚で小さい波を蹴り上げると、夕日に照らされた水しぶきが煌めいた。彼女の足元は、水滴のラピスラズリで飾られていた。

彼女は濡れた素足のまま黒髪の少女のところへ来て、その右隣に腰を下ろし、砂粒が付いた足の裏を夕日に向ける。

「秋の海もいいね」

彼女は満足そうに笑いながら、左にいる少女を見つめる。それに対して黒髪の少女は、目の前の海をじっと見つめている。

「わたし、秋あんまり好きじゃない」

「どうして？」

「やり残したことがあるような気がして、休み明けはちよつと憂鬱になるから」

「そんなもんかなあ」

短髪の少女は空を見上げた。彼女の投げ出した脚についている砂粒を、その左にいる少女は自分の膝越しに見つめた。

この浜辺にも夕闇が迫ってきた。海の青と空の紫が混ざり、水平線は曖昧になっていた。肩にかかっていた長い髪が、海風に揺られてたなびく。

「かゆそうだね。結構腫れてる」

短髪の少女が突然、隣にいる少女の二の腕を指さした。

「これね、昨日の夜刺されちゃって」

黒髪の少女は自分の刺されたところを覗き込み、人差し指で少しさすった。白く柔らかい肌に、赤い跡がくつきりと浮かび上がっている。

「何だか昨夜は暑くて。窓開けてたんだ」

「ちよつと見せて」

短髪の少女は、じつと体育座りをしている少女に寄り添い、その白い二の腕に、睫毛が触れるほどの距離まで、顔を近づけた。

そのまま、彼女は目を閉じ、赤く腫れたところを小さな上唇で優しく触れた。その時、押し寄せる波は落ち着き、穏やかに吹いていた潮風もびたりと収まった。二つの長い影は重なり合い、焼けた砂浜に吸い込まれるようにして消えた。夕日は完全に沈み、夜の暗闇がゆっくりと降りてくる。

短髪の少女は身体をもとの位置に戻し、隣の少女に控えめな笑顔を向けた。

「早く治るかなと思って」

「……ありがとう」

黒髪の少女は一瞬驚いたような表情をしたが、長い髪を耳にかけながら、すぐ横にいる少女の顔の輪郭を、生真面目な瞳で見つめた。

空にはまばらな星が冷たく光り始めた。大気は急激に冷え込み、遠く広がる海は、少女の黒髪やワンピースよりも暗い紺色になっていた。

「そろそろ帰ろうか」

短髪の少女は立ち上がると、脚に付いている砂を軽く払った。そして振り返り、同じく立ち上がるようにしている黒髪の少女に手を貸した。

「また来ようね」

「うん」

彼女たちは二人並んで、砂浜の緩やかな傾斜を登りながら帰っていった。少女たちの足跡は、陸の闇に続いていった。

一匹取り残された私は、しばらく何も考えずただじっとしていた。身体の中に染みこんだ夕焼けの暖かさが、足や触角、翅の先端に至るまで、内側からゆつくりと温めていた。

突風に吹き飛ばされるのに任せて、私はまた海沿いを飛び始めた。時間が経つにつれて、私の中で凝り固まっていたものが、徐々に解されていくようになった。翅の単調なリズムが心地よく響いた。

私はこれまでのことを可能な限り思い出し出していた。草花の汁を吸って、無心で飛んでいた時のことは、

やはりはつきりとは覚えていない。しかし、そのぼやけたモノクロームの記憶は、突然澱んだ紅色に染められた。そして、それから徐々に、私の目に映る風景の色彩は鮮やかになっていった。

今まで吸ってきた血の味はどれ一つとして同じものではなかった。それらの味覚に伴って、その時々々の出来事がハイヴィジョンになって甦る。自分の血が吸われているのを、じっと見つめていた男の味は、甘くまるやかだった。太った大男の血は、その見た目通り脂っこくて、しかし癖になる味だった。腹ごなしにからかった中年男の血は、熱く苦かった。少年たちにも、あのセミの神秘的な光景を見せてあげるべきだっただろうか。あの母親の血はきつと、包み込むような柔らかい味がするに違いない。私に明確な殺意を向けてきたあの男の血は、無味無臭だった。そして、最初の女性の虚ろな両目に見つめられ、私はその黒く濁った血液を思い出す。

私はこれ以上、人間の血を吸うことはできないと直感した。それは、私の奥深くに刻み込まれている

システムに対する反逆だった。

なぜ私は蚊であるのか。いつしか答えるのを放棄した疑問を思い出し、もう一度よく考えてみる。しかし、もはや自分は何者でもないような気がした。

私はある特定の種に限定されることはない。そうではなく、思考を巡らし、本能に抗おうとしている、たつた一つの意識ではない。そして、この答えはとも納得のいくものだった。

導き出した結論に満足すると、静かな喜びがじわじわと、私の胴体から湧き出てきた。翅を一往復させるごとに、その喜びは増幅していった。気がつく、私は初秋の澄んだ夜空を縦横無尽に飛び回っていた。私の自由を縛り付けるものは何もなかった。気の向くままに飛ぶことの楽しさを、私は思い出していた。

血を吸うことなどどうでもよかった。空腹も感じなかった。腐りきって原型をとどめていない後ろ足は、飛んでいる途中につけ根から千切れてしまった。その他あらゆる細々としたことは、この瞬間の喜び

の陰に隠れてしまった。重力は今の私にはゼロに等しかった。この大空すべてが私のために用意されたもののように思えた。

上手く飛ぼうと思った瞬間、翅のストロークは乱れる。思考はただのノイズでしかない。ただ夢中になって、翅を動かすことだけを考える。そうすれば、旋回、とんぼ返り、誰もみ状急降下、どんなアクロバット飛行も意のままにできた。

そして私は、直上に懸かる満月に向かって一直線に飛んでいく。その丸い光は、短い夏の終わりと長い冬の始まりを知らせていた。落ち葉の裏で、小さくなっておびえていた日々が、今では馬鹿馬鹿しいものに思える。

私が一番恐れているのは、残りわずかの命を浪費し、無様に生き延びてしまうことだ。それよりも幸福と喜びの絶頂にある今、この生命に終止符を打ち、幻影の世界へ飛び立ってしまいたい。

徐々に体力がなくなっていくのがわかる。身体の右側はもはや機能していない。それでも私は、必死

に翅を動かそうとした。

あの路地裏から、濁った水溜まりから、知らない場所から、私は生まれ変わり続け、そして永遠に飛び続けるだろう。

月にはどれくらい近づけただろうか。下を覗くと、少女たちがいた砂浜が、とても小さくなって見える。あの時私たちを照らしていた太陽は、夕暮れから夜へ、晩夏から初秋へ沈んでいった。

そして私の現実には終わりを告げ、無限の幻が始まろうとしていた。

その間際の、崩れ落ちていく感情の残骸として拾い上げることができたのは、みじめさと、後悔と、それらをはるかに上回る充実感だけだった。

四

―病室の窓からは、雪がしんしんと降っているのが見える。雪の結晶はゆつくりと、しかし真つ直ぐ

に地面に向かって落ちていく。濃い灰色のなかに、淋しい枯れ木の太い幹が、ぼんやりと浮かんでいた。部屋の中は明るく暖かいが、冬の静けさが、私の周りを包んでいた。

私はベッドで上半身を起こしていた。そして腕に幸せな重みを感じながら、その重さの主である、柔らかなタオルケットに包まれた我が子に目を落とす。娘は安心したように、私の腕の中で眠っている。

小さな口は半開きになっていて、ピンク色の頬には、細かい産毛が輝いていた。私のたった一人の家族。

この子の中には、私の血が流れている。私は、顔の表面に透けている毛細血管を、優しく見つめていた。もう一度窓の方に目を向ける。あの枯れ木は桜だろうか。もう少しすれば満開になって、この子の誕生を祝福してくれるに違いない。

そんな想像をしていると、ふと、一片の桜の花びらが漂ってきて、娘のおでこに舞い落ちた。娘は目を開けると私を見つめて、少し笑った。私はその笑顔に、呟くような声で答えた。

「おはよう」

そして、聞こえるはずのない翅の音で、私は目を覚ます。

「波枕」

壹岐 南海

■受賞のコメント■

宿題の作文以外で、自分の書いた文章が賞をいただいたのは初めてです。今までで一番嬉しい受賞になりました。

今作「波枕」は、他の誰でもなく、私が私に向けて書きたいわば「心」辺整理のような物語です。突然の外出自粛や変わり行く日常に戸惑いながらも、ひとりきりの時間が増えたことは自分について考える良い機会になりました。幼少期の感情体験に題材をとり、過去の自分と折り合いをつけるために書き始めましたが、折角なら誰かに読んでもらおうと思いつき立ち、応募の締切直前になって何とかそれらしいものが出来上がりました。急いで提出したため、印刷の際読点の位置が全部ズレるという大変レベルの低いミスをやらかしました。恥ずかしさの念でいっぱいですが過去は取り戻せないのです。これも折り合いをつけることにします。そんな恥と内省の産物が受賞という形で評価されたことには、昔の自分に対する、ある種のセラピー体験に似た心地良さを覚えました。まさにお風呂の栓をようやく抜いたような気持ちです。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった明治大学文学賞関係者の皆様にご心より感謝を申し上げます。略儀ながら、書中をもちましてお礼とさせていただきます。

波枕

目隠しをした人びとが、まるで儀式のように肅々とサンドイッチを食べるところを見た。

昼休みの大学の中庭で、その集団はほとんど異様と言うべき雰囲気放っていた。彼らの性別や年齢は不揃いで、確かな共通点といえば、皆一様に黒い無地の布で両目をびったり覆い隠していることくらいだろうか。彼らはそれぞれのやり方で自由にくつろぎ、夏の午後の穏やかな時間を満喫していた。簡易な折りたたみ式の椅子にちよこんと座っている人もいれば、日差しに熱された鮮やかな青緑色の人工芝の上に悠々とあぐらをかく人もいた。私を含めた何人かの学生はその不気味な宗教画のような光景に思わず立ち止まり、しばらくの間彼らの行為をしげしげと眺めていた。

この炎天下で、目隠し集団は不可解なほど真剣な様子でサンドイッチを口に運んでいた。ごく丁寧な動作で角の尖ったパンの端をひとくち含むと、口の

中で心ゆくまで時間をかけて咀嚼する。そしてゆっくりと飲み込んだ後、「ふむ、なるほど。今度は少しやり方を変えて試してみよう」とでも言うような興味深げな素振り。で次のひとくちへ食べ進む。どこことなく中国の太極拳を彷彿とさせる彼らの儼かな手の動きは、知らず知らずのうちに私を魅了した。

試験期間の最終日、キャンパス内に人の気配はまばらだった。全ての煩わしい事柄から解放され、待ち焦がれた夏への期待でどことなく晴れやかな顔つきの学生たちが時おり校舎から出てくる。パステルカラーの薄いブラウスを着た女子の三人組が、からころと笑いながら私と彼らの間を早足に通り過ぎていった。ねえ、あれ何だろ。さあ。お芝居でもしてるんじゃないの。えー、なんか前衛的だね。その声にふと我に返り、自分が学期末のレポートを出しに大学へ来たことを思い出した。校舎へ向かう途中、私は何でもない風を装って、その人たちの作り出す静謐な空間の前をさっと行き過ぎた。まるでそこだけがスローモーションの映像のなかから出て来たか

のようだった。茹だる大気に汗ばみながら沈黙と真つ暗闇の不気味なピクニックに興じている彼らは、見れば見るほどひそかな活力の炎に焼かれていた。傍らにぼつんと立てかけられたA面ボードの看板には、太いマジックで「『はたるび』、DIID体験ワークショップ」と書いてあった。

四時過ぎになって家に帰ると、ちようど母さんもパートの仕事を終えて戻ってきたところだった。

「おかえり。暑かったでしょ」

彼女の声には夏特有のうんざりするあの疲労が滲んでいた。居間のテーブルには、今日も四匹の鯛焼きがお行儀よく皿の上に川の字になって寝そべっている。母さんは週のうち三日、駅前のショッピングモールの中の鯛焼きの店で働いていて、私と父さんがいくら食べ飽きたと言ってもしよっちゅう余りをもたらってきた。

「里帆は明日から夏休み？」

「うん」

私は四匹の中から当てずっぽうに選んで食べた。中

身がカスタードクリームのもだった。母さんはクラーの風に当たりながら、うわの空で自分の右の手首のあたりをさすった。一日に何十匹もの鯛焼きをへらでひっくり返すから、しよっちゅう腱鞘炎になるのだ。

「洋ちゃん、これ食べるかな」

しばらくして、母さんはお決まりの調子で呟いた。できるだけ深刻さを出さないようにわざとぼんやりした様子で、まるで私ではなく鯛焼きに話しかけるみたいに皿の上をじっと見つめながら。そして母さんがこの台詞を言う時、私の役割は決まっている。それはこの家の秩序を保つためには必要なことだった。

「私、聞いてくるよ」

台本通りに進めることにした私は、右手に皿を持って奥のお風呂場へと向かった。そこにはいつでも必ずほのかな冷気が香っていた。

洋太はいつも通りそこに座っているようだった。

ドアの擦りガラスの向こうは深い冬の夜の色をして

いて、中の様子を見ることはできない。浴槽に沈んでいる彼が生み出す堪え難い重苦しさだけが、暗闇を浸透して私の顔の皮膚をざわめかせた。ぱちりとスイッチを押して洗面台の電気をつけると、ドアの奥で苛立ちを意味するかすかなざざ波が立った。

「ねえ、鯛焼き、あるけど」

返事はない。ここまでは、台本通りだ。

「カスタードのやつ、私が食べちゃった。チョコのやつはまだ無事」

返事はない。私はしばし間を空け、彼が浴槽の中から何かしらの反応を返すのを待ってみた。自分の声が虚ろな反響になって暗い浴室に揺蕩うのをじっと聴いているとき、本当はこのドアの向こうには誰もいないんじゃないかと思えてくることがある。最近では、洋太が私の呼びかけに答えてくれる確率はめっきり低くなっていた。お互いに黙り込んだまま十五秒ほど経ち、必要なことを全て終えたと判断した私は、電気を消して母さんのいる居間へ戻った。

少し前までは、ほかの双子のきょうだいの多くが

暗黙のうちにそうするように、洋太と私も世界を半分ずつ分け合っていた。午後のおやつ、戦隊ヒーローのおもちや、電子ピアノ、庭のビニールプール、母さんの湿った手のひら、父さんの肩車。変化があったのは小学五年生の夏休みだ。その頃私たち家族は福岡県の西新という海辺のまちに住んでいて、太陽が人々に牙を剥いていた。劈く油蟬の絶叫に空気はめらめら煮えたぎるようで、それは雲ひとつない青空に向かって降参しますと笑い出してしまうほど暑い季節だった。

日曜日がくるたびに私たちは近場の海へと繰り出した。埋め立ての白い砂浜が小綺麗な海で、浅瀬に浮かぶようにして真新しい結婚式場が建っていた。そこから時々空に向かって飛ばされる色とりどりの風船をぼうつと眺めるのが、洋太も私も好きだった。波打ち際で母さんとボール遊びをしていた洋太がとつぜん意識を失った時、私はビニールシートの上で午後のうたた寝をしていた。熱中症は、大人たちだけがやたらと怯えているただの迷信ではないことを

知った。思い返せば自分でも不思議なくらいに私は冷静だった。泣き出すでも、きらめく砂の上にたおれた洋太めがけて一目散に駆け寄るでもなく、ただ母さんが張り裂けるような声で何度も何度も彼の名前を呼ぶのを、目を閉じたままぼんやり聴いていた。私の意識はまるでサイレンのように頭の片隅で鳴り続けるその音を知覚しながらも、同時にそれを事実と認識してしまうことを頑なに拒んだ。自分にとってどれほどの事態が起きているのかが分からなかった。しばらくして頭の中のサイレンが本物になり、揺れる救急車の車内で搬送用のベッドに横たわった洋太の浮腫んだ顔を見つめながら、やがて私は激しく嗚咽した。パニックを起こす心の準備がようやく整ったのだ。実体のない、しかしとてつもなく大きな感情の渦巻きに頭から呑み込まれていた。何か意味のあることを考えようとしても、自分の思考の在り処が長いこと思い出せなくなることがあった。夏は混乱と叫び声の季節に変わり、薄暗い病院の待合室でノートに絵を描いて暇を潰す夜が何度か過ぎた。

洋太が一週間の入院を終えて家に帰ってきた時、彼は既に別人になっていた。性格や話し方こそ最初は何も変わらないように思えたが、そのよそよそしい顔つきを見ればすぐに分かった。いつからか彼の中に、私の知らないどこかずっと遠くの国の風が吹き込んでいた。私は突然持て余すようになった世界の使い道に困りはて、それは洋太の方も同じだった。夕食の後、母さんはお風呂場にも食事を持っていく。トレーの上の料理は半分くらいになって返ってくる日もあれば、まったく手つかずのこともあった。私はちょうどそのタイミングを見計らって、二階へ引き上げることにしている。洋太がお風呂場の浴槽に閉じこもるようになったのは、中学校に上がって四か月が過ぎたあたりからだ。初めはまた彼の新しいひとり遊びが始まったのだと思っていたが、だんだんとその行為は病的な切迫感を帯び、やがて常に水に浸かっているかと思われ、やがて常態化した。洋太は眠る時でさえ浴槽から出るのを拒んだため、夜中に彼が人知れず溺れることを恐れた母さん

が、洗面所の床に自分の布団を敷いて一緒に寝ていた時期もあった。そうして洋太が長く沈んでいるよ
うなとき、私はよく家から近くの銭湯へ連れて行か
れた。こもった水蒸気のおいやすべすべした檜の
床はいつでも私の心を弾ませたし、母さんは帰り際
に自動販売機のアイスクリームを買ってくれた。だ
けど母さんが優しい笑顔で「洋ちゃんには内緒ね」
と言うたびに、内緒にされているのは自分の方だと
いう気がしてならなかった。父さんの転勤で東京の
新居に引っ越してきて間もなく、二階に簡素なシャ
ワールームが増設された。洋太が家族に気兼ねする
ことなく、いつでも水の中いられるようにするた
めだった。その頃には彼は一週間のうち半日ほどし
か学校に行かなくなっていたし、私たちの方も何ら
かの解決策を強く望んでいた。自分がお風呂に入ろ
うとするたびに、この世の終わりのような顔をして
渋々浴槽から出てくる洋太と顔を合わせるのにすっ
かり嫌気がさしていたのだ。

シャワーを済ませて一階に降りると、お風呂場か

ら二人の静かな話し声が聞こえてきた。途切れ途切
れに続く遠慮がちな言葉の受け渡しは、小瓶に詰め
た誰かへの手紙をそつと海に流すかのような光景を
いつも私に連想させる。洋太が自分から会話を交わ
す相手は、今ではほとんど母さんだけになった。と
いつても、本当にひどい時は何週間ものあいだ塞ぎ
込んで、誰の呼びかけにもいっさい反応しなくなる
こともある。家じゅうどこにいても、浴室のドアの
隙間から有毒ガスのように滲み出る彼の存在に押し
つぶされそうになり、そんな日が長く続くと流石に
かなり気が滅入った。それでも、母さんと話してい
る時の洋太の声は限りなく慈愛に近いやさしい響き
を節々に帯びていた。いつの間にか声変わりしてい
たので、今の洋太の声には未だに耳馴染みがない。
年に二、三回、とくべつに機嫌がいい日には、洋太
は浴槽から身を乗り出して母さんの髪に白髪染めを
塗ってあげることもあった。その日の夜だけは、母
さんは珍しく寝室の明かりを消してぐっすり眠るこ
とができた。

メールで指定のあった場所に行くと、そこには既に十数人ほど集まっていて、人々は数人の小さな島々に分かれて会話を楽しんでいた。「ほたるび」の次のセツシヨンの開催場所は府中の浅間山公園という自然豊かなところだった。公園の入口は土曜のお昼前のうらかな陽光でいっぱい満たされ、足元のスニーカーは薄く透きとおった金色に染まっていた。

私はおらずと輪の中に入り、ひらがなで「つちや」と書かれたプラスチックの名札をつけた男の人を見つけた。メールの件名欄に名前があった人で、私が遠慮がちに声をかけるとすぐに気がついたようだった。

「古賀さん？古賀、里帆さんやね。初参加の」

土屋さんは寒色のチェック柄のシャツを着て、右手に白杖を携えていた。ふくふくした丸顔で、細められた目元が優しそうだ。見た目の雰囲気とは裏腹に、豪快な関西弁を話した。

「おかしかったでしょ。あんな大学のど真ん中でねえ、妙な人達が無言でピクニックなんかしよって」話の中で、彼は自身が運営する支援団体「ほたるび」が毎週主催している「セツシヨン」について、D I D——ダイアログ・イン・ザ・ダークといわれるものアレレンジ版だと説明した。

元々D I Dっていうのは、ずっと昔にドイツの哲学者が考案した催しみたいなものでね。僕らみたいな視覚障害者が「アテンド」、つまり案内役になって、皆さんに真っ暗闇の世界でいるいろと面白いことを体験して頂こうっていう目的なんやけど。それを、参加者同士がより深くコミュニケーション取れるようにアレコレ改造して、こういう今の形になりました。まあ、ひとまず今日はお試し気分楽しんでっただけ。

ほどなく開始時間になり、全体での大まかな説明の後、くじ引きで今回の「ペア」を決めることになった。私のペアはサトコさんという、三十五歳の女の子になった。左右の耳たぶに二つずつ開いた裸の

ピアスホールが印象的だった。軽い自己紹介の時間が設けられ、そこでサトコさんが夢のために看護学校に通っていること、「ほたるび」には「自分に正直になりたい時に来ている」ことなどを知った。夢、という単語をこんなに臆面なく言う年上の人には、今まで会ったことがなかった。

セツシヨンは大抵の場合四十分を二セット、ペアでアテンド役を交代して行うという。アテンド役は目隠ししたペアの相手を連れて公園の中を散策し、相手が視覚以外の感覚を存分に使って自然を楽しめるような色々な工夫を凝らす。セツシヨンの間、ペア同士で会話することはできない。

「初めは怖いかもしれないけど、慣れてくるとちょっととした冒険みたいで楽しいんだよ」
黒いバンダナを私の頭の後ろで結びながら、サトコさんは朗らかに言った。

視界を布で覆われた途端、私は突如として一面の暗闇のなかに放り出された。容赦ない日差しに晒されていた瞼の皮膚が、心地よい涼しさを喜んで受け

入れる。妙に気恥ずかしくなった私は、目隠しされた人がよくそうするように、意味もなく辺りを見回す素振りをしてみたり、存在しない電気のスイッチを探すかのようにうろろと手を彷徨わせたりした。

暗闇のなかには、想像をはるかに超える大騒ぎの空間だった。蝉が、鳥が、熱気をかき混ぜる湿った微風さえもが固有の「声」を持ち、ひっきりなしに何かを主張して怒鳴り合っていた。それは生まれて初めて出会う賑やかな暗闇であり、毎晩私の部屋にやって来ては、朝の目覚ましが鳴るまで無遠慮に居座るあの物言わぬ暗闇とは違う。視界を奪われたこと、いい具合にアドレナリンが出たのか、無意識のうち私に私の口元は緩んでいた。遊園地で友達とジェットコースターの列に並んでいる時のような気持ちだった。「わくわくする」感覚を自分がまだ失くしていないことが、なんだか無性にくすぐったかった。

スタート地点と思しきポイントに立ち、土屋さんの「いつてらっしゅい」という呑気な声に送られて私たちはゆっくりと歩き始めた。私の左腕に掴まるよ

うにしてびったりと寄り添ったサトコさんが、慎重なペースで先導してくれる。五十歩ほどまっすぐ行くと、早くもスニーカーの先に何かがぶつかった。硬く乾いているが人懐っこいその感触に、アスレチックの遊具を思い出す。どうすればいいか分からずにその場で凝り固まっていると、サトコさんの手が二の腕のあたりをとんとんと軽く叩いた。「ここに段差がありますよ」と伝える合図だ。という事はおそらく、丸太が連なった階段かなにかが目の前にあるのだろう。おっかなびつくり足を上げて、一段上る。私が何事もなく上り終えるのを待ってから、また「とんとん」。もう一段。初期の興奮が過ぎると、今度は必死に上っている自分が少し情けなくなってくる。掴まるための手すりも見つからないので、汗ばんだ手でサトコさんの薄手のカーディガンを破けそうなほど握っていないなければならない。段数を数えるのを諦めたころ、ようやく合図が止まった。丸太の感触が、今度は砂粒の混じった平らな地面に変わっている。正面から涼風が吹き込み、私たちとすれ違って

来た方の道を抜けていった。誇張でもなんでもなく、私は胸を撫で下ろした。十数段ほどの階段を上りきるのに、体感で八分くらいはかかった気がする。それとも過集中の状態にあったからそう感じただけで、実際にはもつと短いかもしれない。

またしばらく歩いた後、サトコさんがある地点で不意に立ち止まった。ひよつとすると道がいくつかに分かれていて、私が歩きやすいコースはどこか考えてくれているのだろうか。この時点ですでに私は彼女の淀みない挙動に一定の安心感を抱いていたから、さしたる動揺も感じなかった。どちらにせよ、今の私には黙って彼女の次の案内を待つことしか出来ない。そしてその心地よい無力感を味わった時、私は何の前兆もなく今までとは全くべつの空間に踏み入れていた。

実際には踏み入れたというより、開けた、という表現の方が正しい。その空間はまぎれもなく自分の内側から湧き上がる感動によってもたらされるものだった。自分ではない誰かの手によって守られ、世

界中のあらゆる不安や恐怖から遠く隔てられているという安心感。その感覚は、本当は生まれた時から絶え間なく私を取り巻いていたものなのだろうが、今日まで一度も気付かずになっていたようだ。立ち止まっていたほんの数秒の間に、私は夏でもそれ以外でもないなにか別の美しい季節のさなかにいた。木々のそよぐ音は調和のとれたひとつの旋律となつて、あらゆる方角から私に向けて惜しみなく降り注いだ。感じるものすべてが、刹那のうちにあたたかい祝福の輝きへと形を変える。それは肌に柔らかく溶けるバターのような陽の光や、あるいは額をなで上げる森の息吹であつた。今の私は余計な知も情も持たず、ただ世界の真ん中になすすべもなく立ち尽くすひとつの命に過ぎなかつた。夢見るような気分のまま、サトコさんに連れられて豊かな森の中を歩き回つた。彼女は時々私の手をやさしく引つ張つては色々なものに触れさせてくれた。私を取り囲む気候や自然はどんな優れた詩よりも雄弁だつた。波打つ木の肌や、甘く香る花びらのなめらかな質感は、そつと触れる

たびに息をのむ程の切実さで私に訴えかけてきた。十五分ほど経過した頃だつただろうか。サトコさんの導く指先にひやりとした金属の硬さを感じた。探つてみると、先が三つ又状に分かれた平たい部品が付いている。手をかけて勢いよく捻ると、足元のコンクリートに叩きつける小気味よい水の音がした。音を聴くだけでも首のうしろがきんと冷えるようだ。私は心持ち身をかがめて、流水に手のひらをひたしてみた。

その瞬間、暗闇のなかに青い燐光がはじけた。光の点滅に誘発されて、瞬間的に立ち眩みが起こる。突然自分の身に生じた初めての現象に、私の意識は数秒のあいだフリーズした。これはいわゆる幻視、のようなものだろうか。いや、たぶん太陽の光が何かが目隠しの布を透過して、花火みたいにちらついて見えただけだ。しかしその光景は気のせいというにはあまりに鮮明で、気が付くと私は奇妙な幽体離脱の感覚にとらわれていた。つめたいと思つていた水の流れは、触ると確かに肌が栗立つほどつめたか

ったのだが、そのつめたさはなにか私ではない別の人のものだという感じがした。水の音は声高に何かを訴えていて、じつと聴き入っているとそのうち何かとても大切なことを思い出しそうになる。分かりそうに分からないもどかしさに、その場でじたばたと足を踏み鳴らしたい衝動に駆られた。水から手を離すと不可思議な感覚は瞬く間に離れていき、それからもう五分ほどして、私たちはスタート地点への道を戻り始めた。

私の目隠しを解くと、サトコさんは得意顔で「ね、楽しかったでしょう」と言った。後に続く私のガイドは彼女と比べるとあまりにもお粗末だったが、それでも彼女が楽しめるように精一杯の努力をした。自分の取り組みに対してこれほど熱心になったのはずいぶんと久しぶりの事だった。自分はその気になればまずまず献身的な感情を持てるという発見は、私にうれしい驚きを与えた。初めての体験にひとしきり感動し、その満足の後に訪れたのは、彼女にも同じ快さを感じてもらいたいという限りなく純度の

高い欲求だった。サトコさんは私と違って物怖じせずにとんどん前へ進んでいくタイプで、何かに触れるたびに顔を綻ばせては子供みたくはしゃいだ。

「リホちゃんの足音って、静かなんだね。寝てる人の真横を、起こさないようにそっと歩いてるみたい」すべてのセツシヨンの後、お互いへのフィードバックをする時間があつた。いつの間にか、私たちの間には信頼に似た気さくな関係が生まれ始めていた。私とサトコさんを結び付けた今日の体験は、カフェ

に何時間も居座って延々と互いの身の上話をするよりもいくらか手荒な方法ではあつた。その結果、私は自分という長編小説に新たな登場人物の名前を書き加えた。

「激しい音って苦手なんです。すごく大きかったり、乱暴なやり方で鳴っている音とかが」

「じゃあライブハウスなんか、きつと地獄だ」

「多分ね。どっちも行ったことないけど……。ライブハウスも、地獄も」

私たちの背後で、まるでブルーハワイのかき氷が

じりじり溶け出すように、空と雲が時間をかけて混ざり合っていく。騒がしかった鳥の声や風の音はやがて眠りについた。暗闇のなくなった世界は静かな微睡みに深く沈んでいて、近くの家の屋根をゆらめく陽炎がその眠気に拍車をかけている。ふと、浴槽の中でじつと息をひそめる洋太の姿が瞼の裏をよぎった。洋太も母さんと同じで、きつともう何年もよく眠れていないのかもしれない。彼の暗闇は、いったいどんな音がするのだろうか。

家に帰った後、母さんと一緒に居間の照明を蛍光灯からレトロな裸電球につけ替えた。「電球色は他の照明器具と比べて、いちばんリラックス効果があるんですって」と、母さんは店員さんから受け売りの知識を披露した。夕暮れを温かい牛乳で溶いたようなオレンジの光が、テーブルのこげ茶と混ざって不均一なキヤラメル色を作る。

「ねえ、なにか映画でも見ようよ」

今夜の母さんは上機嫌だった。夜ご飯の品目も普段よりひと皿多かったし、おどけて私の脇腹を何度も

つついては、父さんが会社の人から貰ってきた高いワインを今すぐこっそり開けてしまおうと言った。見ると、今朝まで不揃いなグレーだった髪の毛の生え際が綺麗な紅茶色に染まっている。

私はリュックサックから黒いバンダナを取ってくと、ソファに座ってくつろいでいる母さんのすぐ後ろに回った。

「なあに、私はまた娘の実験台にされちゃうの」

「違うよ。ちよっと今日の復習をするだけ」

「ああ、これ、濡れた葉っぱの匂いがする」

目隠しをした母さんの姿は妙に間が抜けていて、見ているだけで吹き出しそうになる。今日得た感覚をヒントにして、少しでも彼女の睡眠時間が延びればいいと思つての試みだった。両手を引いてソファから立ち上がらせると、母さんは落ち着かなさそうに自分の肘の辺りを撫でた。ねえ、どうすればいいの。なんにも見えなくてちよっと怖いわ。

私はスマートフォンを起動して、何でもいいから穏やかな曲調の音楽をかけた。母さんは、もう少し

暗闇と仲良くなるべきだよ。それからダンスのエスコートをしてみたいに腰に手を回して、部屋の中をゆっくり歩き回った。サトコさんがしてくれたのと同じように、親切に、できるだけ遊び心たっぷりに。やっぱり母さんはまだまだ暗いところが苦手な様子だった。些細な物音にもいちいち肩を強張らせたし、途中で何度か話題を映画に戻して私の興味を逸らすうとしていた。それでも、私が貝殻飾りのついた写真立てを触らせたり、冷蔵庫を開けて漂う冷気の中に顔を突っ込ませたりすると、母さんはその度に小さく相づちを打って興味があるような振りをしてくれた。かけていたカフェミュージック風のジャズが終わり、間髪入れずに今度は知らないロックバンドの曲が流れ始めた。すると、けたたましいギターの音に合わせて母さんが弦をめちやくちやにかき鳴らすジュエスチャーをして、口パクで激しくシャウトしだしたので私は床にくずおれて涙が出るほど笑った。エア・リサイクルの真っ最中に帰ってきた父さんは、居間のドアを開けた途端私たちを見て素っ頓狂な声

をあげた。

次に参加したセッションのペアの相手は、ホテルスタッフの専門学校で先生をやっている猫好きの女の子だった。消防士を目指している同い年の男の子の日もあった。土屋さん曰く、彼らのような人たちはホスピタリティの精神を学ぶ研修の一環として「ほたるび」に来ているらしい。見たところ、セッションには好ましい効果があるようだ。彼らの差し出す手のひらはみな温かく、頼もしく、ほんの少しだけさみしかった。

「リホちゃん、もう全然怖がらなくなったねえ。だけどまだ私に遠慮してるみたい」

何度目かのセッションの後、サトコさんが不意にそう切り出した。

「何か言おうとするたび、申し訳なさそうな顔するでしょう。って言うと、ほら、また謝ろうとしてる」
屈託のない笑顔でサトコさんに言われ、私は軽く笑い返そうとしたが、内心とても動揺していた。核心

を突かれたり、そのことで気遣われたりすると、昔からどうしても声が震えてしまう。私の心の微細な揺れを瞬時に感じ取ったサトコさんは、真摯な顔つきで謝った。ごめんなさい、無遠慮なこと言つて。

「いえ。私、多分そうなんです。いつもいつも、心の中で謝ってるんです」

「誰に？」

「兄にかな。といつても、双子だから歳は変わらないんだけど」

洗いざらい、という言葉はこういう時に使うのだろうか。今まで本当に誰にも話せずにいたことを、私は初めてサトコさんに打ち明けた。彼女は私が目目を気にしなくて済むように、わざわざ近くのカラオケの部屋を取ってくれた。

洋太は、一度だけ自らの意思である浴槽から出たことがあった。私たちふたりが中学二年生に進級した頃のことだ。真夜中に目が覚め、水を飲もうと台所へ向かった私はそこで彼と鉢合わせた。洋太は真裸で、体じゅうから水滴をしたたらせて暗い台所

に突っ立っていた。陸に上がった人魚の幽霊みたいだった。廊下から漏れる白い蛍光灯の明かりが、私と洋太の間をひと筋の線で隔てていた。いくら待ってみても、彼はじっと押し黙ってこちらを見つめるだけだった。しかし、今思えばあれは確かに彼の精いっぱい意思表示だったのだ。彼は公園の鳥や花たちがしたのと同じように、これ以上ない激しさを私に何かを主張していた。しかし自分の動揺に耐えきれなくなつた私は、思わず「洋太、どうしたの。具合悪いの」と声を張り上げてしまった。私がわざと両親の寝室に聞こえるように名前を強調して言ったのを、洋太はちゃんと分かっていた。本当に助けを求めていたのは、私ではなく彼の方だったのに。あの瞬間、私は彼のなかで燃えていた炎を消してしまった。母さんたちが慌ただしく足音を響かせて台所へ入ってくるまで、私は洋太の顔を見なかった。その夜以来、洋太は再び浴槽に閉じこもり、私と話すことはなくなった。

「あの時……、私が黙って兄のする事をただ見守つ

てあげていたら、何か違ったんじゃないかって思うんです。なんであんな風に言っちゃったんだろう」咄嗟に両親の助けを呼んだのは怖かったからでも、洋太が心配だったからでもない。きつと、自分を動揺させたくなかったからだ。その頃の私は今以上に刺激に対して過敏だった。母さんに相談しようとは思わなかったが、教室で誰かが机を軋ませるかすかな音にさえ怯えていた。ぎりぎりの所でなんとか保っている世界の均衡を、または洋太によって壊されるのが耐えられなかった。

黙って私の話を聞いていたサトコさんが、突然思い出したように口を開いた。

「ねえ、知ってた？地獄って、本人の罪の意識でできてるんだって」

「そうなんですか」

「それってつまりさ、気に病まなければ誰でも天国に行けるってことじゃん。……あのね、リホちゃん
の気持ち、なんかちよつとだけわかる気がするんだ。
凶々しいかもしれないけど」

——だって、私も前はそうだったから。サトコさんは私のために彼女の深い部分を少しだけ見せてくれた。彼女には、同棲している二つ年上の女性の恋人がいること。その人と一緒に住むことを決めた時、父親が激しく反対し、自分のセクシャリティをひどい言い方で拒絶されたこと。そして、父親とは未だにほとんど絶縁状態のまま今に至ること。現在もサトコさんは、下高井戸の小さなアパートにその女性と二人で暮らしているという。「対決は、なるべく早い方がいいよ」と付け足すと、彼女はウーロン茶のグラスを呷った。

「いつもは気にしないようにしてるんだけど、たまにすごく謝りたくなる時があるの。そんな風に思う自分はずっと嫌いだった。でも知り合いの勧めで『ほたるび』に通い始めてから、前より自分に正直になれた気がする。許すことから始められる未来って、結構あるのよ。簡単じゃないのは確かだけど」

それを聞いて、私は突然大声でうわーっと叫びながら走り出したような衝動に駆られた。オーブン

の中の生地みたいに膨れ上がった感情を、どうにかして体の外へ分散させたかった。ソファに座ったまま急に手足をじたばたさせ始めた私を見て、サトコさんは目を丸くして笑った。

「ちよつと、私、歌います」

「おつ、いいね。私も好きなバンドの曲入れちゃおう」

「今度、ライブハウスにも行ってみたいな。うるさいのも、たまにはいいと思えてきたから」

八月の最後の一週間は、曇りがちな日が続いた。ドアを開けた途端、家の中に梅雨の夜の病室みたいに陰った空気が充滿しているのが分かった。廊下の電気がついているから、きつともう母さんが帰ってきているのだろう。私は無意識にTシャツの胸元を握りしめた。

母さんはシソの縁に手をつけて凭れかかり、こめかみを抑えて俯いていた。私はリュックサックを床に放り出して、ぐったりした彼女の背中をさする

うと足早に近寄った。ねえ、頭痛いの。大丈夫？母さんは何も言わずに力なく首を横に振るだけだった。足元の花柄のキッチンマットはわずかに湿っていて、よく見ると母さんの青白いつま先にも水滴が付着していた。

お風呂場へ向かう気持ちになったのは、サトコさんの言葉が私の停滞していた感情を突き動かしたからかもしれない。——対決は、なるべく早い方がいい。浴室の電気はついていて、きつと母さんがつけた後、消さずにその場を後にしたのだ。断りも入れずにこのドアを開けるのは、本当に初めてのことだった。

洋太がいる。彼の姿をもう長い事見ていなかった気がした。洋太はうす緑色の水の中で華奢な体を二つに折って座っている。開けたそばから、私は戸惑いのあまりその場に硬直した。彼の首から下の部分が、もはやほとんど実在として知覚できなくなっていることに気づいたからだ。彼の体はかろうじてまだこの世界に存在していたが、既に淡い残り香のよ

うだった。じつと動かない手足や水の中できらめく細い産毛は、確かにそこにあるのに、見ているともう何十年も昔のできごとだったかのように思えてくる。質量の感じられない彼の手足の末端は、水面下でまやかしのようにだんだん透き通り、どれだけ目を凝らしてみてもついに確かな水との境い目を見つげ出すことはできなかつた。まるで生首だけが水面にまっすぐ立って浮いているみたいだ。ラムネ瓶のなかで人知れず抜けていく炭酸のように、彼の存在が刻々と失われ始めていた。しかし実際のところ、その戸惑いはもう何年も前から予兆されていたものだったのだ。それは初めて彼が三日続けて学校を休んだ日か、あるいは母さんが不眠症の薬を飲み始めた日、いや、もつとずっと以前からだ。あの夏、あの西新の海で、砂浜に横たわった彼の小さな背中を見た瞬間から、私は一種の同じ予感に苛まれ続けてきた。——洋太は、ある日突然泡みたいにふつとどこへ消えてしまふんじゃないか。

洋太は私が来たことに気づいていないのか、膝に

額をつけ、口を半開きにさせて耽っている。「何に」耽っているのか私には分からないが、やはり彼はただひたすらに耽っているのだった。息をすることさえ煩わしいようで、時折思い出したように長い溜息をついた。言葉が見つからず、私は長いこと擦りガラスのドアを開けっぱなしにして立ちすくんでいた。すると、やがて洋太がだんだん切れかけのストロボのようになつていくのが分かつた。水の中で小さな波紋さえ立てないまま彼の輪郭だけがちらちらと不規則な明滅を始め、瞬間的な消失と出現を交互に繰り返している。彼の存在がひどく不安定になつていくことに恐怖を覚えた私は、思わず「何してんの」と悲鳴に近い声をあげた。集中を乱され、明滅をやめた洋太はぱつと顔を上げると、伸びた前髪の隙間から私を見た。よそよそしい瞳は、かつて真夜中の台所で一瞬だけ見せた彼の憎悪そのものだった。渦巻く怨嗟が、彼の目を通して頭のなかにまで響き渡ってくるようだ。邪魔なんだよ、お前。いつもいっ

「いま、何をしてたの」

「……」

「いつからそんななの」

私の声は誰が聞いても分かるほどに震えていた。

「……母さんの所へ行けよ」

重苦しい沈黙の後、洋太は吐き捨てるように言った。彼の拒絶はこれまでで最も頑なだった。私が諦めてお風呂場を出ていくまで、彼は一度たりとも態度を和らげる気配を見せなかった。洋太をどうにかこの家に繋ぎ止めておくには、私ではあまりにも不十分だった。濡れた足を拭かずに浴室を出た私は、シンクの上で音もなく泣いている母さんの所へ戻りしかなかった。

天気予報は今年一番の猛暑を謳っていたが、目隠しをするとなぜだかあまり暑さを感じない。自分で思っているよりも、感覚のほとんどを両目から得る情報だけに頼っていたのだと分かる。もう何日も朦朧としていた私の意識は、暗闇を吸収するに連れて

冴えわたった。油蟬は公園の入口で、差し迫った夏の終わりを忘れようと必死に鳴きわめいていた。

サトコさんに手を引かれて、もう何度目かの坂を上る。柔軟剤と湿った土の甘い匂いが大気にゆらめいて、私の鼻腔までやってくる。吹く風がぼんやりとした大きな塊から個々に独立したひと筋ずつの直線になって、皮膚を貫いていくのが分かった。感じる事象すべてが深刻なほどに意味を持ちはじめ。今までただの背景に過ぎなかったものにピントが合い、代わりに自分自身の内的な感覚は次第にぼやけていくのだった。

上るうちに傾斜がきつくなってきたのか、全身が鉛のように重くなる。それなのに呼吸は一定の遅いリズムで自動的に繰り返され、苦しいどころか安らかな心地でさえあった。一步、一步と踏み出すことにかかる重力は増していく。足の裏がじんじんと脈打ち、そのたびごとに体内のエネルギーを真下の地面へと還元していった。木々の葉が擦れる地鳴りのような音で鼓膜が割れそうになる。際限なく密度の

上がっていく空間のなかで、私はどこかの到達点に向かつて脇目も振らずに進んでいた。全身が流れ星のように高熱を持っていたが、暑くはない。真つ暗闇のなかを青い燐光がそこかしこで迸っている。もはや暗闇とも呼べないその狂乱の地はまるで音と光の工事現場だった。燐光は視界の隅でだんだんと鮮烈に青めいていくのに、いざ注意を向けようとする途端に跡形もなく消えてしまう。私は声を出さずに戦慄した。心の奥底で、ほんの少しでも集中を切らせばもう二度とここに来られなくなると分かっていた。頂上に近づけば近づくほど、私の意識は重たい体から離れてひとりで浮遊していく。気が付くと手足の感覚がすっかりなくなっていた。サトコさんが隣にいるのか、彼女の手が触れているのかどうかさえ、今となっては分からない。私はさんざめく暗闇のなかを一人で歩いてきた。目指す場所は、もうすぐそこまで迫っている。すると、透明なぬかるみのようなものに足を掬われ、とうとう次の一步を踏むこともできなくなった。私は降り注ぐ轟音のな

かでじつと息を殺し、何もかもを受け入れて、これから起こることに身を任せようとした。その意識に呼応し、やがて世界が認識できないほどの速さで回転を始める。青い光の残像は、細く尾を引いてメリーゴーランドのように巡りだす。私は地面にしつかりと両足をつけ、ぐるぐる、ぐるぐる回る世界のただ一つの軸となって立ち尽くしていた。それはちょうど、洋太が昔好きだった公園の遊具とよく似ていた。

数時間後、私は病院のベッドの上で目を覚ました。意識が戻ってきててもすぐには起き上がらず、目を閉じたまましばらく周囲に耳を澄ましてみた。廊下では、誰かが忙しくノリノリウムの床の上を行き来する鋭い音が鳴っている。遠くなった蝉の音が、今も私をあの荒れ狂う世界から呼んでいるような気がした。手足はまだずっしりと重たかったが、さっきまでの世界そのものに集中線かけたような深刻さや、どこかへ上り詰める感覚はすでに霧散していた。無

機質な白灰色の天井をぼんやり眺めているうちに、もう何十分かして母さんが病室に駆け込んできた。見たこともないほど真っ青になった母さんは、ドアを開けて私の顔を見るなりその場に崩れ落ちた。少し遅れて病院に着いた父さんは、私の頭に手を置いて深く息を吐いた。受け取ったコンビニの袋には、カップのアイスクリームと雑誌が数冊入っていた。六時を回り、窓の外は深紅とぶどう色のグラデーシオンに染まりつつあった。ベッド脇の背もたれのない椅子に座った母さんが、ふと読んでいた本から顔を上げて呟いた。

「夏生まれなのにね」

「何が」

「あなたと洋ちゃん。なのに、二人とも暑さに弱いなんでね。私、もう夏が大嫌いになっちゃった。きつとこれから一生、こんな季節なくなればいいのにつて思い続けることになるわ」

「私、倒れたの？」

「そう。熱中症ですって」

その瞬間、頭のなかで鐘が鳴ったような気がした。それからもうしばらく母さんは私の傍についていてくれ、やがて父さんが車で迎えに来ると、忘れずに水分補給をするよう何度も念を押してから帰っていた。退院するまでの時間を、私はベッドの中で雑誌を読みながら、サトコさんのことやあの青い光のこと、洋太のことを考えて過ごした。その間にみるみる体力が衰えてしまったらしく、一週間後、府中駅から電車に乗って家へ帰っただけで私はすっかり疲れ果てていた。ドアを開けて迎えてくれた母さんの顔を見ると、彼女も少しやつれたようだった。帰ってからも完全に回復するまでもう何日かかかったため、九月の前半は私が眠っている間に過ぎ去ってしまった。特に風のつめたかったある火曜日を境に、蟬の声はどこからも聞こえてこなくなつた。永い昼寝から醒め、喉が渴いた私は居間へ降りた。廊下は薄暗く、今が何時なのかもよく分からない。宇宙のように静まり返った部屋の中で、静かに動くものの気配があった。洋太だった。色褪せた長袖の

Tシャツを着ている。ずっと前に同じものを着た彼を見たことがあった。離れて見る洋太の立ち姿は記憶の中の彼よりも大きく、想像の中の彼よりは小さかった。

「どうしたの」

彼は戸棚の引き出しを探る作業を中断し、私の姿を捉えると、ほんの少しだけぼつ悪そうな顔をした。小さい頃の洋太は、私が珍しく風邪を引いた時だけは、いつもより心なしか優しく接してくれたものだ。部屋のなかは私たちふたりではち切れんばかりに満ちていた。この前まで後ろが透けて見えるようだったのに、今の洋太はかえって無視できないほどの質量で部屋の中心にはつきりと存在しているのだった。

「あった」

戸棚の奥から塩が詰まった四角い袋を見つけ出すと、彼は虚空に向けて私に聞かせるための独り言をいった。お風呂場へ向かって歩いていく途中、ほんの一瞬だけ視線が重なった。髪の毛がツタ植物のように

伸びて、彼の青白い顔の輪郭を覆い隠していた。

しばらくして、晴れた日の波打ち際に似た音が聞こえてきた。離れた場所から浴室を覗き込むと、洋太が袋を逆さにして中の塩を浴槽の上にあけていた。水面に触れたそばから白い煙の余韻と共に消えていくその光景は、神聖な儀式のイメージを私に抱かせた。

入れ終わると彼はタイルの床に膝をつき、泡立つ水の中に右手を浸して、そのまましばらくの間静止していた。化石のようになった洋太の体は、やがて空間と溶け合い、この前と同じようにちらちらと明滅し始めた。私は今度こそ口を閉ざして、彼のする事を後ろからだ見つめていた。できるだけ沢山見とおかないと、ずっと時間が経ってから後悔するような予感があったのだ。十分ほど経過した頃、洋太はとつぜん電池が入ったようにびくりと指先を動かした。

「やっぱり本物じゃないと駄目だ」

揺らぐ水の上に視線を落としたまま、さして残念そ

うでもないような声音で彼は言った。きつと試す前から大方予想はついていたのだろう。だからわざわざクロゼットから服を出してきて、家に私以外誰もいないこのタイミングを選んで行動したのだろう。

私は彼に聞いた。あのぐるぐる回る、青い光の方へ行くの？

振り返った洋太が、数秒のあいだ私の顔を凝視した。私も彼の顔をしっかりと見つめ返したが、そこにはもう息苦しさはなかった。長い沈黙の後、彼は小さく頷いたようにも見えたが、実際はただ目を逸らしただけかもしれない。毛先に水滴を実らせた黒い髪が、薄暗い部屋の中で鈍く発光していた。その光景が、灼けつくほどにさみしかった。

「また会える？」

震えをこらえて、なんとか私はそう聞くことができた。べつにこじやなくなっていたいい。ずっと未来の、どこか外国の知らない街角とか、朝の静かな歩道橋の上で。洋太は確かな答えをくれなかった。低く澄

んだ声で、里帆、だいじようぶだよ、と言った。ただ、お前にとつて俺がいなくなるだけだよ。その口調は今まで聞いたなかでいちばん穏やかだった。言い終わると、彼は私を空っぽの居間に残して行ってしまった。

洋太が部屋から去った後、私はお風呂場の電気を消し、浴槽の水に浸かってゆっくり息をしてみた。既に一種の懐かしさへと変わり始めていたあの感覚の、わずかな粒子だけがそこに残っている。目を閉じると、うす明るい青色の光がちらちら灯っているのがみえた。まるで、誰もいない夜の水族館みたいだ。理解というには少し足りないが、それでも漠然と分かることがあった。私は引き止められたのだ。ある種の未熟さによって、あるいはサトコさんの細くしたたかな手によって。だけど洋太はあの十年前の夏、限りなく近いところまでそこに辿り着いてしまった。そして彼は、今まさにあの静かで激しい世界の一部になろうとしている。

買い物から帰ってきた母さんは、びしょ濡れの服

を着たままお風呂場から出てきた私を見ると、初めて見せる壮絶な表情を浮かべて立ち尽くした。その瞳の奥には数えきれない悲しみが幾重にも重なっていた。きつと母さんは、私よりもずっと以前からこのことを予感していたのだろう。

「帰ってくるの？」

長い時間が経って、母さんはようやくそれだけ聞いた。私は力なく首を横に振った。彼女は何も言わず、彫像のように動かないままとめどなく涙を流した。

その体の至るところに、彼女がこれまで紡いできた数多の物語が宿っていた。やさしい目尻のしわに、結び目からほつれた髪の毛の褪せた灰色に、首筋に咲いたネモフィラの花のような血管に。やがて私の両目からも大粒のあたたかい水滴が流れ落ちていったが、それは泣いているというより、何日も塞ぎっぱなしにしていた浴槽の栓を抜いたみたいに思えた。洋太がいなくなった家のなかには、既に安らかな思いの出のおいが満ち始めていた。今この瞬間から彼の存在は過去のものになり、とめどない時間の波に

押し流されて彼方へと遠ざかっていく。許すことから始めようと思った。起きてしまったことも、ついに成し遂げられなかったことも。乗り越えなくていい、許すことで少しずつ癒えるものがあるのならばそれでいい。

どこから聴こえてくる波の音で目が覚めた。窓の外ではいつの間にか夜が明け、寝室に浮かぶ埃の粒子に柔い陽光が当たっていた。枕元に置かれたスマートフォンを点けると、一件のメッセージが届いていた。それは彼が私に向けて流した最初で最後の小瓶だった。送られてきたのは「さようなら」でも「お元気で」でも「母さんによろしく」でもなく、たった一枚の海辺の写真だった。

空は淡く曇っていて、白い縁飾りのついた波の綾の奥に、どこまでも続く青い光の国が息づいていた。西新の、あの穏やかに微睡むような海のもとへ彼は行ったのだ。揺らぐ水面は孤独そのもののような色をして、画面上で永遠の夏に閉じ込められている。

私は目を閉じ、液晶を耳に当てて彼の低い声が潮騒のあいだから語りかけてくるのを待った。

静かな部屋のなかはうつくしい金色の朝で満ちていた。

阿久悠作詞賞
三田完
選評

全体講評

まずは課題のタイトルについて。

人類はフィクションを造ることで歴史を築いてきた——と論じたユヴァル・ノア・ハラリの著作『サピエンス全史』を意識したのが「サピエンスをよろしく」です。では「小春日和」は？ じつは、さだまさしが山口百恵のために書いた『小春日和』という詞があつたのです。ところが、レコード・プロデューサーの判断で、その歌は『秋桜』とタイトルを変えて発売されました。結果、今も歌い継がれるヒット曲に。でも、「小春日和」も悪くはない……ということ。

今回は111篇と、いままでで最高の

応募数となりました。コロナ禍で通常と違う学園生活を余儀なくされている皆さんが、作詞活動に意欲を示してくださったことに深甚の敬意を表したいと思います。

数だけではなく、作品のレベルも年々向上しています。面白い作品が多々あり、審査しながら目移りがして困りました。個人的には、縦書きの作品が多かったのも、〈歌謡曲〉という感じがして、嬉しいことでした。

結果、課題の『サピエンスをよろしく』をタイトルにした作品を大賞に選びました。きっと、面白いメロディーがつくと思います。

言葉を紡ぐ活動をつづけるかぎり、ホモ・サピエンス（考える人）には未来があります。

受賞作品講評

大賞『サピエンスをよろしく』

このタイトルで、コロナ禍、原子力行政、異常気象……等々、現代のすべてを真面目に語ることができず。しかし、あえてちやらかした、まるで書割りのセットで宇宙旅行をするような歌ができたことに、拍手。いわば、21世紀の「スーダラ節」と思いました。(そういわれても、若い作者にはピンと来ないでしょうが)

8 Kテレビの次には16 Kが、ケータイは5 Gにつづいて6 Gが——
進歩すること自体が目的であるサイエンスに、サピエンスはどうつきあつていけばいいのか？ 先行きが見えない不安があればこそ、無責任男になってしまふ。高度経済成長のさなか、植木等が映画で演じた平均たいこうもじも同じ気持だったことでしょう。

佳作『星・合ひ・愛』

牽牛と織女が出会う七夕のことを、平安時代の人たちは「星合ひ」と称しました。そんな古めかしい言葉に、現代の女性の気持ちを重ねた作品です。「バカなベガでごめんね」というフレーズが素晴らしい。タイトルは『星・愛』でよかったのでは？

佳作『西参道の片隅で』

表参道ではなく、西参道を選んだところがシブい。現実の街を歩いていて、ふと境界を超えて夢の世界に入ってしまった——そんな印象です。

言葉遊びが効いています。井上陽水が歌ったらいいだろうな、と思いました。

佳作『しわ』

大学生がこういう詞を……最初は違和感を感じました。しかし、歌だからこそ、男性が女性になることができ、若者が老人になることもできる。意欲的な挑戦です。老いがテーマとはいえ、救いのあるシャンソン。

「サピエンスをよろしく」

小野 胡桃

■受賞のコメント■

この度は、大賞という素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございました。このような機会をくださった明治大学文学部、明治大学連合父母会、株式会社阿久悠、審査員の皆様に心より感謝申し上げます。ならばに、作曲をしてくださる方、歌唱をしてくださる方にも厚くお礼申し上げます。

私はこれまでに作詞をした経験がなく、手探りの状態で今回の歌詞を作り上げることとなりました。そこで、課題タイトルの「サピエンスをよろしく」を見たときに偶然浮かんだ「サイエンス」という言葉を軸にストーリーを組み立てていき、星の終末を迎えた人類の、開き直ったように樂觀的なその後を描くに至りました。宇宙へと飛び出してしまった彼らの如く、勢いだけで進めた作詞でしたが、些細な思いつきが繋がり合って歌詞へと変わっていく感覚は得難いものであり、今回の経験を通して作詞の楽しみの一端に触れることができたのではないかと思っております。そのような意味でも、阿久悠作詞賞という貴重な機会を頂きましたことを、改めてお礼申し上げます。

サピエンスをよろしく

ワレワレハ ウチュウジンデスなんて
ふざけたジョークを飛ばして笑う
ハロー、こんにちは 挨拶の練習
新しい星の皆々様に ご迷惑のないように

地球を離れて何光年 何光年で何万年？
どこへだっけて行けるさ僕らは
先も知らずに

サピエンスだっけてサイエンス次第
ぶっ飛んでなんでちよつと待ってって
行き過ぎちゃったら戻れない？
それはそれでそんなもんでしよう
一歩進んで三歩進んだら 四歩進んでもっと先へ

ワレワレノ ウンメイヤイカニ？
映画でも作って丸儲けしよう
ああどうもどうも 拍手喝采
試写会はそうお次の星で 長いお手足の皆様と

地球を離れて何光年 何光年もう何万年？
どこへだつて行くんだ僕らは
もう帰れない

サピエンスだつてサイエンス次第
ぶつ飛ばしてあれれやっちまったつて
行き過ぎちゃつたら戻れない？
それはそれでそんなもんなんです
四歩進んで六歩進んだら 十歩進んでもっと先へ

地球を離れて何光年 何光年でももういいや
どこへだつて行こうよ僕らは
先の先まで

サピエンスだつてサイエンス次第
ぶつ飛ばしちまえどうだつていいよ
行き過ぎちゃつたらもう戻らない
それはそれでそんなもんだからさ
何十歩だつて何百歩だつて 進んでこうぜもつともつと

挨拶なんてさつとすましちゃつて さあさ握手だよろしくね
サピエンスをよろしく、ね

作編曲 竹中俊二
歌 唱 太田仁子

「星 - 合ひ・愛 -」

秦 歩之歌

■受賞のコメント■

この度は、第12回明治大学文学賞阿久悠作詞賞の佳作という名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に思います。

私は、大学に入学してから作詞を始めました。きっかけは、基礎ゼミナールの音楽論の授業で学んだことを何かに生かしたいと思ったからです。作詞活動の経験は浅いですが、歌詞を考える中で面白い視点から物事を考えたり、自分の見た景色や時代を言葉として綴っていく過程がとても楽しく作詞活動にどんどんのめり込んでいきました。

今回受賞した作品の題名にも含まれている「星合ひ」とは、七夕の別名で、陰暦7月7日の夜、牽牛・織女の二星が会うことを意味します。昨年の七夕の時期にこの言葉の意味についてふと想像を膨らませてみたところ思いついたのがこの歌詞でした。私たちと等身大の少女の恋心を星合ひにかけた歌詞になっているので今恋愛に悩んでいる人の心に届いたら嬉しいです。現在、コロナ禍にあり大変な状況ではございますが、だからこそ私は今苦労されている人に寄り添うことができるような歌詞をこれからも作っていききたいと思います。

最後に、このような素晴らしい機会を設けてくださっている明治大学文学部、連合父母会、株式会社阿久悠、協力してくれた友達や弟を含め支えてくださったすべての関係者の皆さまに感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

星
―合ひ・愛―

空を見上げると 電線の五線譜
星が音符になって メロディー奏でてる

思い出させるの この星空が
離れてくあなたのかげ 何億光年

行かないで行かないで 何度も言ったよ
けど待っててくれたのは 夜明けだけ

星合ひの日に 心は曇りなんて
あなたのこと見えやしないよね
もう一度会いたい 願っているの
バカなベガでごめんね

空を見上げると 今日雨模様
私が歌っても 届かないのね

涙に包まれる この星空が
目に浮かぶあなたのかげ 流せたらいいのに
そばにいてそばにいて この手離さないで
もう私とあなた繋ぐのは この雨だけ

星合ひの日に 心は曇りなんて
あなたのこと見えるはずないよね
忘れられないぬくもり 感じてるの
バカなベガでごめんね

今日だけお願い 叶えてよ
あなたのそばにいたい
ただそれだけ

星合ひの日に 心は曇りだから
あたしのこと 見えてないんでしょ
ねえもつともつと輝くから
見つけてよ バカなベガでごめんね

「しわ」

小島 淳之介

■受賞のコメント■

阿久悠先生のお名前を冠する賞をいただき、大変光栄です。「また逢う日まで」「狙いうち」「勝手にしやがれ」「渚のシンドバッド」・・・、私の好きな歌には、先生の作詞した歌がいくつもあります。

受賞の知らせがあり、かなり久方ぶりに、阿久悠記念館を訪ねました。

以前に来たのは、たしか私が中学生の頃でした。明治大学のリバティアアカデミーで学んでいた祖父に連れられて、立ち寄ったことをおぼろげに覚えています。

昨夏、その祖父の三回忌を終えました。

自分が卒業できなかった明治大学に私が入学した時、自分のことのように喜んでくれた祖父。今もそのときの笑顔が思い出されます。ふと書き連ねた歌詞で賞をいただけたのも、祖父に導かれたように感じています。あの日、阿久悠記念館に連れられて行っていなければ、もしかしたら応募してみようとは思わなかったかもしれません。

最後になりますが、このような発表の機会を設けていただき、ありがとうございました。

これからも、言葉を大切にして、さらに精進していきます。

しわ

私の皺のひとすじは
あの あの笑顔の積み重ね

あの頃の友は皆
もう会えないところにいるけど
悴んだ指先に思ひ出はあるから
寂しくても笑えるわ

私の白髪的一本も
あの あの恋の成れの果て
いろんな愛に染まった後は
もう色なんて要らないの

あなたには今はまだ
数えきれない未来があるけど
尽せない可能性は荷物になるから
手放したら自由だわ

私の痣の一つさえ
あの あの汗の足跡ね
嫌だと思つた傷さえも
もうどこにあるか忘れたわ

夕方の縁側で
黄昏を抱きしめる
曲がった腰で闊歩して
宵闇を待っている

私の皺のひとすじは
あの あの笑顔の積み重ね
最期に残す微笑みは
あなたに残す贈り物

「西参道の片隅で」

大塚 和佳

■受賞のコメント■

この度はありがとうございます。恥ずかしながら明かさせていただきますと、今回は三年連続三回目の挑戦でした。大学入学以降、明治大学文学賞の存在が、私の行くあてのない極めてスロースペースな創作という営みに一つの大きな目標と張り合いを持たせてくれたことは間違いありません。おかげで何とか毎年数作ずつ、行き場のない感覚を小さな宝物に変えることができました。

そして今回、自分にとって大切な場所をモチーフにしたこの作品を選出していただいたことに、他には代えられない喜びがあります。知る人ぞ知るビストロとして数十年間の歴史を刻んできた「くりくり」は、一昨年から形態を変えて営業しています。私が初めて訪れたのは一昨年四月、雨の日の空きコマのことです。緊張しながら扉を開けた私を、あたたかい香りが迎え入れてくれました。その後お店の方とお話しさせていただくようにもなり、心の拠り所となりました。昨年四月以降伺うのを自粛していますが、できるだけ早く報告しに行きたいと思えます。

最後に改めて、この賞に関わる全ての方々にご心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

西参道の片隅で

きれいな地名が好きだと 珍しく息が合った
ブエノスアイレス イスタンブール

誰でも知ってる場所でありますが

神田川なんかも素敵です

そんな歌が昔あったよ

陽だまりの一步内側 柔らかな時が流れてる

目印はエメラルドの格子

青い標識の曲がり角

絵本の夢の中のような 店の名はくりくり

足跡刻みながら 時代の隅に佇んで

流れ者たちまたひとり

そつと扉を開ける

ハーブを摘みに行こうかと 珍しく案内してくれた

レモンバーベナ ナスタチウム

私は知らないことばかりですが

和服ソムリエも素敵です

アラビアンハットも素敵です

陽だまりの一步外側 鮮やかな時が流れてる

出逢えて嬉しい場所だから
名前で呼んでほしいから
絵本の夢の中では 素直な自分でありたい
足跡感じながら 時代の隅を訪れて
流れ者たちまたひとり
そつと明日を開く

ステンドグラスに日は傾いて さようならポットが告げた
ポークジンジャー クレームダンジュ
またすぐにでも伺いますって 笑顔の私言っただのに

目印はエメラルドの格子
青い標識の曲がり角
どれだけ時が進んでも 店の名はくりくり
足跡見えなくなっても この角に佇んで
ずつと繋がっているんだよ
そつと微笑んでいる

第12回（2020年度）
明治大学文学賞 受賞作品集

2021年2月 発行

編集・発行 明治大学文学部

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
